



琉球談



ル 4
3458



琉球談

五二

門ヲ呂 6
號 948
卷

門ル 4
號 3458
卷



琉球談序

琉球在薩之南部海中蓋
一小島也慶長中臣附于
薩然在其上世源鎮西宍
垂因統即其為屬於我也
亦已尚之大島象主人嘗着



萬國新話西細亞一部業已
梓行琉球後亦收其中而以韓
琉蝦久屬

本朝世亦粗諳其國事故
臨梓除之日者書賈重請
其初稿以梓之需予之予之然

國業大傳民事細碩詳悉
書中予更何言即書此言
以序實政庚戌秋九月

蘭溪前野達



琉球談 二十餘

目錄

- 琉球國の畧説
- 開闢の始附 鎮西八郎
- 鬼ヶ山鳥へ渡る説
- 日本へ往來の始
- 官位并官服圖説
- 琉球國王の圖
- 年中行支
- 元服の支
- 剃髪
- 家作圖式
- 米藏の圖
- 器財圖説
- 駕籠の圖
- 馬之圖説

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 蘭語、音、大、日、本、往、來、始、官、位、官、服、圖、説、琉、球、國、王、の、圖、元、服、の、支、家、作、圖、式、器、財、圖、説、馬、之、圖、説]

名門
948
卷



- 女市圖説
- 噴を好む
- 琉球の狂言
- 神祇
- 葬式
- 書法
- 貢物
- 琉球語
- 讀谷山王子日本紀行の詠歌
- 通計二十條
- 婦人乃風俗
- 歌舞の圖説
- 琉球歌
- 宗派
- 棺擲并墳墓
- 耕作
- 産物
- 屏風附いろはの後

琉球談

東都 森嶋中良 著



○琉球國の畧説

琉球國古名ハ流虬リウキウト云。中山世鑑録に云。地の形。虬龍リウキウの水中に浮ぶ如く。其の形。宋書リウキウ是。小佐々元史。瑠求リウキウとあり。明の洪武年中。段て琉球の文字。吾邦リウキウあり。古くハ字リウキウ麻廼リウキウ久リウキウと云。又

琉球談

神代紀小海宮フミツノウミノミヤは、此玉なる御事予う撰
 ろる万象雜組の中地之部は、しんじき神代紀小海宮に載るに
 け國の下郷しんじきあり、土人ともは琉球とも云々、いすず屋其菴
 と云ふ蓋、いすず其の玉は旧名なりと、中山傳信録小見へ
 ころ其地の薩州の南百四十里あり、いすず南北長サ六十
 里、東西十四五里なりと云う、昔八國をこふあり、
 所傳中山山南山北あり、然る大琉球中山南十二
 世尚巴志と云う國王山南山北を併せと云う、中山
 一統は、いすず此玉に屬する島二十六あり、地圖を
 三國通覽云、其地諸書小載これ畧きぬ。

○開闢の始 附 鎮西八島鬼々寫へ渡りて
 中山世鑑云、琉球の始祖を天孫氏アマミコといふ、其くじめ
 一男一女自然アマミコ生ず、アマミコ夫婦あり、是阿摩美
 久アマミコといふ、アマミコ中良業といふ天皇アマミコより、
 天孫氏といふ國王のけり、アマミコ之あり、二男八諸産の始と
 あり、三男は百姓は始とあり、長女を君と、二女は祝と
 といふ、國の守護神といふ、一人は天神とあり、一人は
 海神ウミノカミといふ、天孫氏アマミコの末裔ウヂノコト二十五代世を倭ヤマトに
 あり、アマミコ一萬七千八百二年に、アマミコて断絶ツグと云ふ、アマミコ史を
 鎮西八島為朝の子、舜天舜天の子といふ者、國王とあり、

吾子義わがこぎなりて天孫氏の末裔小位を懐きあつちのうら中良案なかのらふ中山傳信録に

舜天八日しんてん八日やちふち人皇の後裔大里おほのさと按司朝公あせのあさひの男子おとこなりと

記せり。大里おほのさと地名。按司あせの官名。大里おほのさと按司あせの男子おとこなりと

朝公あさひハ為胡あまのこの為賦あまのこ督あまのこを稱あまのこしとる

ありし。白石先生あらいしの琉球事畧あらいしに。二條院永萬年

中あらいし。為新海あらいし小浮あらいしび。流あらいし小あらいし従あらいしひと。由あらいし紙あらいし求あらいし之あらいし。琉球あらいし王あらいし小あらいし至あらいしり。

流あらいし不あらいし求あらいしるの義あらいしにあらいしよりて。流あらいし求あらいしと改あらいし稱あらいしせり。と

いふ。此あらいし流あらいし求あらいしるべし。んあらいし是あらいしより先あらいし此あらいし名あらいしあり。國人あらいし其あらいし武あらいし勇あらいしに畏あらいしれ服あらいしせ。

そまのをを流あらいし求あらいしと名あらいし付あらいし。遂あらいし小あらいし大里あらいし按司あらいしの妹あらいし小あらいしお具あらいしし

て舜天あらいし王あらいしを産あらいし。為朝あらいし此あらいし王あらいしに止あらいしり。日あらいし以あらいしし。故あらいし土あらいし代あらいし

る事あらいし林あらいし一あらいし。終あらいしくあらいし。遂あらいし小あらいし具あらいしにあらいし由あらいしまると。云あらいしく和漢

三才圖會あらいしに。為新あらいし遊あらいしして後あらいし初あらいしをあらいしま。神号あらいし瓜あらいし舜天

太神宮あらいしといふと記あらいしせり。周あらいし小あらいし記あらいしを。為朝あらいし十あらいし八あらいし歳あらいし

の時あらいし。父あらいし六あらいし條判官あらいし為義あらいしと同あらいしく。新院あらいしの御味あらいし方あらいしや

かり。軍破あらいして伊豆國あらいしに流あらいしる。二十九歳あらいしありて鬼あらいし寫あらいし

へ渡り。歸あらいし玉あらいしの後あらいし。國人あらいし等あらいしが祈あらいし小あらいし依あらいしく。官兵あらいしをさ。一向

られ。二十三歳あらいしありて自あらいし殺あらいしあしり。保元平治物語あらいしに

見えたり。白石先生あらいしに。新あらいし寫あらいしといふ事あらいしの別

今の琉球あらいしも是あらいしなり。と。それあらいしも。何あらいしなり。と。つうれ。と。也。

所見あらいしなり。愚案あらいしふ。此地あらいしの古名あらいしを。屋あらいし其あらいし惹あらいし寫あらいし也。

いふ。或あらいしハ文字あらいしを以あらいして。惡鬼あらいし納あらいし寫あらいしとも。事あらいしに依あらいしり。海あらいし舎あらいし

流求あらいし炎あらいし

三

去る説ありん。

○日本(付)来の始

琉球事畧云。後花園院。宝徳三年七月。琉球人
 来りて。義政將軍に賤子貫と。方物を献ぐ。是を
 以て其玉人。兵庫の浦小来りて交易はと云。案
 に十五代尚金福といふ玉王。位小立し時あり。是より
 代八四代後花園。後土御門。年八百二十三年を歴く。
 正親町院元龜十一年。琉球人来りて産物を献ぐ。
 薩摩國との隣小る事。源く好を通じ。續紀と名
 けり。年毎小る物を贈りしが。慶長年中。彼玉の玉王

邪那といふ者。大明と識く國王を以て。是日(一)の
 来を以て。薩州の太守。島津陸奥守家久。使
 を遣りて。故を以て。邪那使小對して。程々の
 礼を振ひ。我久大不憐。同十三年。駿府小越き。
 神君小見え。其証を以て。殊伐を以て。其
 神志。義久が所存小まり。由命あり。れば。聖子
 二月。兵船。百艘を以て。攻付。諸土切を抽て
 攻へく。同年四月。首里小礼入し。玉王尚寧を擄り
 て。凱陳す。尚寧王。日本に居事三年。過を悔罪を謝
 漸く。不。事。を。以。て。神君

琉球記

神君 慶長十一年 以時

義久小琉球國を属しくみりたり。永代附庸の國
とあり。はと一はつるを正教をうまひして。

將軍家御代習りみ。中山王より慶賀の使臣を来聘
せしむ。彼等の代習りみ。將軍家御代命と。後お
度より使を遣せらるりて。之として後位以嗣。他日恩謝
の使を遣りあり。其國唐と日本のる不有に嗣封
乃時ハ清よりも冊封を文たり。去ども。亦ハをく。
日本ハをきか。日本の扶助おわれり。常任の日用
をも亦びりりあり。去りて。法人耶麻刀を
称し。甚日本以るるといひたり。

○官位并冠服圖説

位ハ一品より九品まであり。勿論正統の別あり。王の子を
を王子と稱す。正一品 領を按司と稱す 後一品○古ハ按司
領地小住居して其
地を治りし。各權威を握り。依り。第十七代の玉王尚眞。制を設。首里の城
下小住居せし。察事紀官と。友人を一人づり。其領内を
支配せし。歳の終小物成を。按司の多く納めむ。
天曹司。地曹司。人曹司として。國家の
政を成司り大臣を。三月官親方と稱す。正一品 吏を以下
の大臣を。親方と稱す。後二品 親雲上と稱するものハ武友
たり。三品より七品 里之子と稱するハ扈從の少童たり。八品
筑登之と稱するハ九品たり。

○國王ハ圖のぬく烏紗帽。小朱紅纓。龍頭の替雲。流の紋

ある袍を着し。犀角白玉の帯を用由。何處も明朝乃
 制あり。今清朝の丹封を文をわく。冠服ハ古を改
 めど。一品以下帽ハ等。簪四等。帶四等あり。其荒袴ハ
 一品と金の簪。彩織緞の帽。錦の帯。緑糸の袍を着せ
江戸(未聘)より後ハ一品あり。
玉王の名代ハ玉の衣冠を着用也。
 二品ハ金の簪。從二品ハ彩を金とく
此後ハ深青色の
 此後ハ龍蟠の紋あり。其たる帯。功あり。若ハ
 袍を着せ。三品ハ銀の簪。其たる綾の帽。帶袍も小
 二品に同じ。四品ハ純蟠の紋を織り。紅糸帯。簪
 帽袍。三品に同じ。五品ハ雜色花帯。其外ハ京に同じ。
 六品七品ハ黄をわく。袴の帽。簪と袍も三品に同じ。帯

ハ五品と同じ。八品九品ハ大紅緞紗の帽。其他ハ京
 小同じ。雜職ハ紅絹の帽。其他ハ七品に同じ。洞の簪。
 紅布此帽。或ハ緑布の帽を蒙り。八里長保長がど
 かり。青布の帽。其たる。百姓頭目かり。凡そ友後ハ
 平服より丈長く。上を帯め。心ゆる。いり。ゆと
 寛やうふ。着る。紙夾烟袋がど。懐も。今。事。日。本
 の如し。童子此衣後ハ三寸半の招明あり。え後
 乃時縫流。え後ハ下裁り。女人の服もさ
 して。髪をひなし。外衣を襦袢し。左右の手を。襟を曳
 くと。衣の制。日。本。と。同。一。衣。と。い。ふ。其。後。小

琉球國王



さとの
里之子
扈從の袴



琉球言

〇

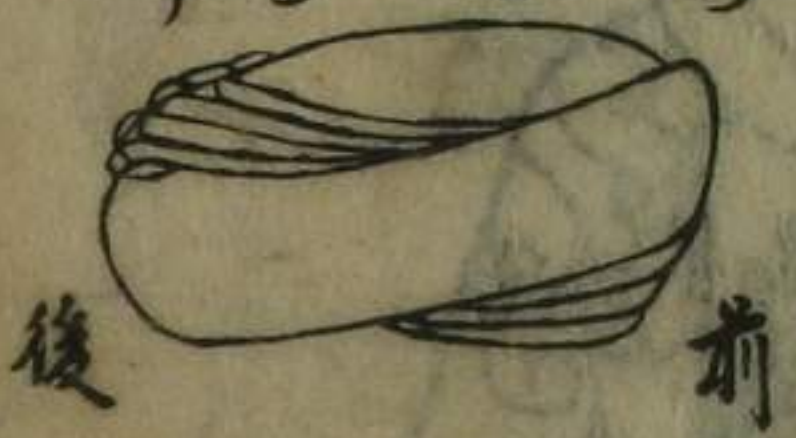
王帽

玉冠紗
少く僧
小玉
二玉を
載く



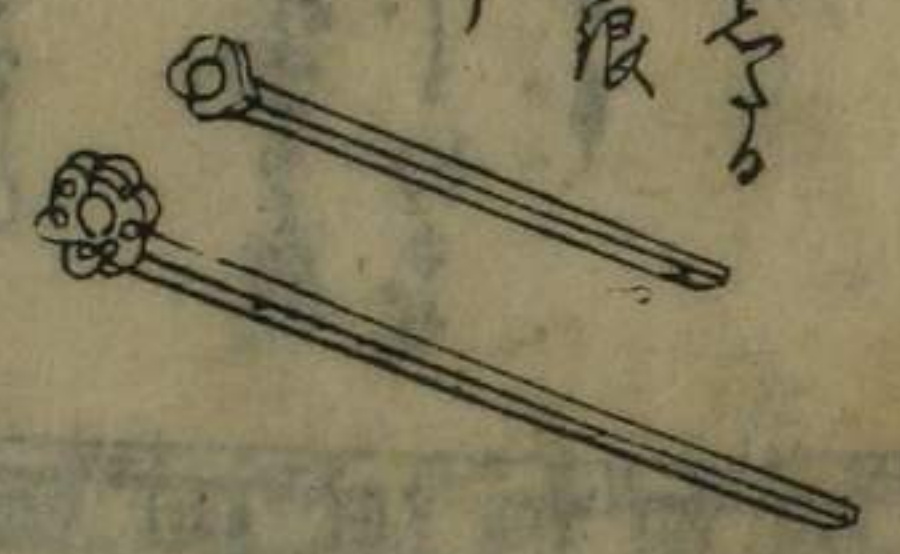
官民帽

一品より九品までの
制皆同一の形
を骨子とて僧
前ふ七寸と後
十二の寸とあり
ゆゑに骨子を
上小記とす



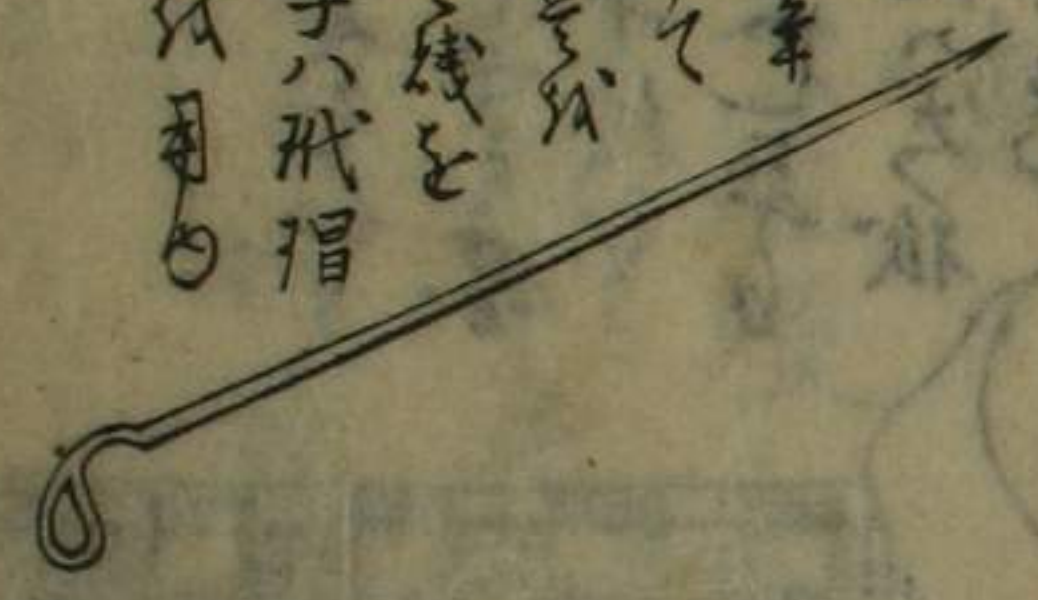
短簪

長サ三四寸元後志
者ふれは月白金銀
洞ありは上
ふハし



長簪

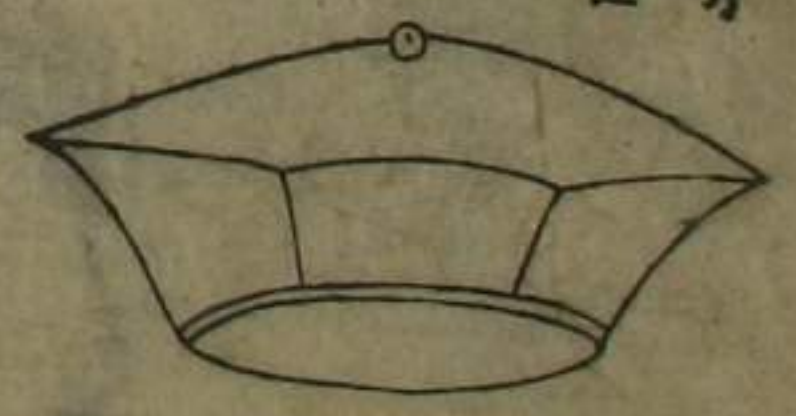
長サ尺余婦人か
の男子元後志
髻の大ききもの
月白金銀としを
分り民家の女子ハ
おと制し



流末茨

片帽

黒き結ありは
六の角ありは
樂人茶道ハ
別製とす
おれを月白



笠

菱葉を以て
草を以て
内以て
藤あり
墜あり



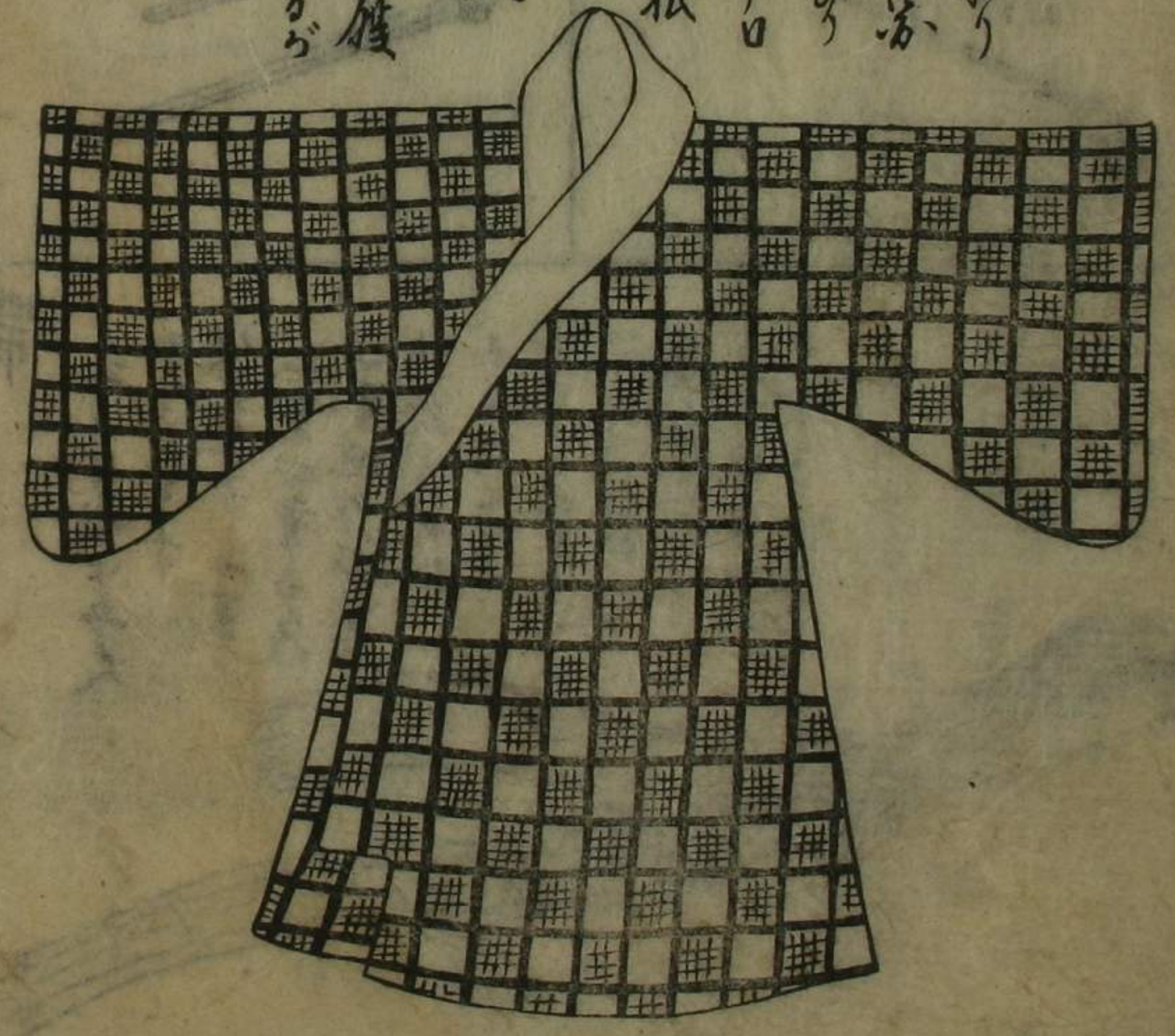
帯

長サを以て
五尺七寸
腰を以て
三重四重あり
地紋は別
あり
裁りあり
此帯の裁を
後所が
として好む
人



衣

袖大廿二尺をかり
長サ一尺八寸をかり
その物ハ平紋あり
右後ハ丈七寸半日
着るもの物ハ大抵
芭蕉布の行
織を用ひぬ
此ハ足袋等も履
日本と同一カ
由志小圖セザ



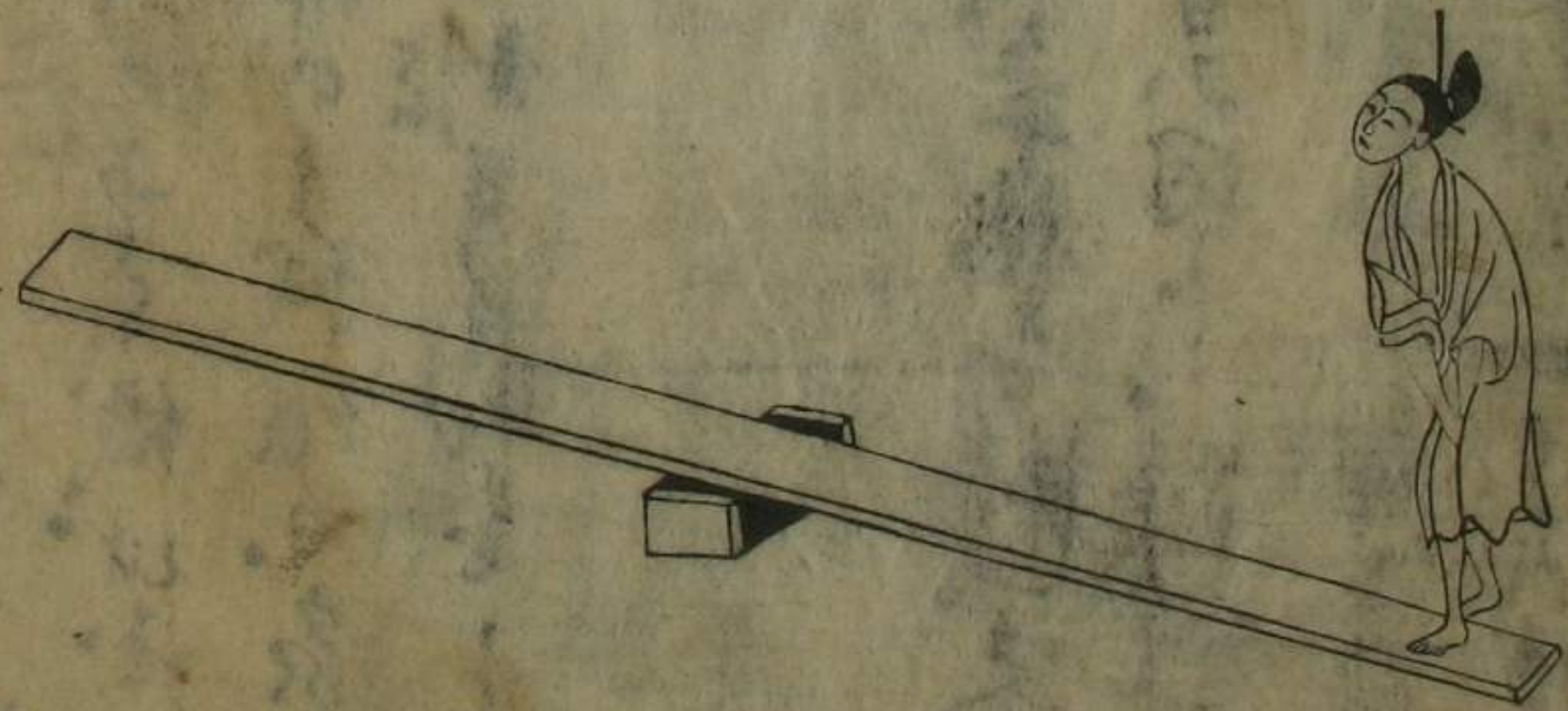
両面を反覆して着るもの極小制し
く帽帯の織物ハ唐土閩より地あり織付玉(賣)
後ハ琉球國よりハ芭蕉布の織物ハ家々
の女子皆手織小巾首里より制する物を上品
とす

○年中行吏

正月元旦國王冠服を改て先々年徳を拜し吏より
諸位の礼儀文同十五日の式元旦不同ト
王より茶と酒と紙場ふ爾氏長の女子ハ越とほ等々
搥びまゝ板を不戯を取る事の如く中へ木

琉球談 卷九

板舞之圖



の臺^{たい}に居^ゐ其上^{その上}へ板^{いた}を渡^{わた}す。二人の女子^{ににのむすめ}、兩^{ふた}端^{はた}を對^{むか}ひ
 て立^た。一人^{ひとり}躍^{はな}り上^あれば、一人^{ひとり}ハ下^{くだ}に下^{くだ}り。躍^{はな}り上^ある女子^{むすめ}、
 木の板^いを渡^{わた}り、縁^{えり}にみく。あかた下^{くだ}り女子^{むすめ}、
 之^{これ}に上^あり。其^{その}新^{あらた}妙^{たぎ}倒^{たふ}す。其^{その}地^ちは極^{ごく}地^ち
 を智^ちり、二十^{にじゅう}六^{じゅう}度^どを度^ど。暖^{ぬく}氣^きも格^{かく}別^{べつ}みく。板^{いた}の
 長^{なが}も短^{みじか}び。長^{なが}春^{はる}ハ四^よ季^きとも。に花^{はな}度^ども。日^ひけてけ月^{つき}は
 空^{そら}とも。羊^{ひつ}躑^{しつ}躑^{しつ}ハ詩^し文^{ぶん}又^{また}事^{こと}なり。元^{もと}日^ひ王^{わう}宮^{みやう}の行^{ぎやう}瓶^{びん}
 小^こ挿^さす。恒^{とこ}例^{れい}あり。薩^{さつ}州^{しゅう}の人^{ひと}乃^{すなは}ち事^{こと}話^わあり。蛇^{へび}は
 冬^{ふゆ}に穴^{あな}を出^で。始^{はじめ}く電^{いかづち}し。雷^{かみかみ}す。つら夏^{なつ}は冬^{ふゆ}を。板^{いた}を
 の実^み熟^{じやく}す。元^{もと}朝^{あさ}は冬^{ふゆ}に今^{いま}ふ。正^{ただ}之^{これ}五^ご九^くの四^よ月^{げつ}を

國人五月と名は多く婦女海邊より出たり種を祥
して福以祈ふ。禱信添ふ哉。

○二月十二日家くくも汲井し。女子八井の水を汲
く。額を洗ふ。此日病は免ゆ。五月
や土筆萌出。海棠。春菊。百合の花満開。蟋蟀鳴る。

○三月上巳の節句とて往來。艾糕を焼く。餠。石竹。
菖蒲。墨栗。牡丹。花咲く。紫蘇。秋。虹。始
く。ん。也。

○四月ささ事。鉄線。并。筆。出。蝸。鳴。き。蚯蚓
出。螻蛄。鳴。り。芭蕉。実。を。結。ぶ。國人。を。試。井。處。と。さ。る。く。

○五月端午。角黍を焼く。蒲酒を飲事。日午のぬし。
此月稲登る。吉日。以。選。ん。く。福の汁をたぐり。出。し。
て。後。新。收。む。と。り。明の夏子陽使録。國中。小
女王と。い。ふ。神。有。り。玉王の姉妹。世く。神の告。原。に。
是に。等。り。五穀。成。時。小。乃。く。け。神女。取。く。と。り。以。種
を。採。く。と。り。以。種。を。採。く。其。女王の。喜。ぶ。前。に。獲
入。る。稻。を。食。ふ。時。は。之。不。小。令。以。其。不。由。意。稲。登。人
能。く。多。し。此月蓮の花咲く。施。石。榴。熟。す。
○六月の節句あり。六月の節句中に。陸。飯。を。蒸。く。送。り。
此月也。沙魚。岸。に。登。り。て。席。と。り。鹿。も。暑。を。畏

引く。海辺不出く。水取晒す。年化して。海魚と
なる。枯梗枝桑花并く。

○七月十二日。門外小追火の炬火照して先祀を
迎へ十五日の盆供ふ。日午し。事なり。
此月。竜眼肉実瓜結ぶ。

○八月十六夜。月を拜す。白露瓜八月の節よりし
赤飯をほくお飾る。其前後二日。男男女女戸
閉く。業以休む。是を守天孫と号す。け岡小角
と下れ。かか。蛇小齧。木芙蓉花
花さく。

○九月梅花咲け。お飾り。霜を瓜収り。蛇
を瓜に害をなす。此月の蛇小傷けけらる。立
どる。お死に扱ふ。八月の守天孫小。三日間。活
む。田ハ盡く。蝦土。麦の種を下け。十月
○十月蛇穴不整し。虹霧く見えたり。お児の紙
瓜あぐ。

○十一月。お飾り。葉実け。枸杞紅小を。蛇州を
お飾り。其外。小。事なり。

○十二月。庚子庚午。小。日。糯米の粉を
授の葉ふて。三重四重に包み。蕪。菘めく。

うらを鬼塚と名付く餉^{くわ}たり。土人の後子。昔
此^こに鬼出^{おにで}りし時^{とき}け物を化^まくおありしとありて
是^{こゝ}共^{ども}遠^{とほ}きく^はおありし。驅^{おこ}難^{やま}禳^{やま}疫^{やま}の^まを^まへ
し。二十四日^{にじゅうよっぴつ}電^{でん}風^{ふう}送^{おこ}り。如^{ごと}去年^{こぞ}正月^{しょうげつ}日^{にち}鳴^なく^く電^{でん}を
送^{おこ}り。電^{でん}の^まを^ま送^{おこ}り

○元服

此^こ國人^{こくにん}元^{げん}服^{ふく}以^も前^{まへ}ハ^ハ髻^{むす}成^{なり}蛇^まの^まを^まく^くめ^くめ^くり
長^{なが}の^まを^ま下^{くだ}より^{より}上^あへ^へ送^まる^るに^に串^{くわ}き^きて^て其^{その}先^{まへ}ハ
額^{ひたい}不^ふ翹^{せう}たり。既^{すで}不^ふ成^{なり}長^{なが}て^て冠^{かん}を^まく^くハ^ハ
頂^{うへ}の^ま髪^{かみ}以^も剃^ひく^く髻^{むす}を^ま小^こく^くし^し。髪^{かみ}を^ま善^{ぜん}く^くと^と其^{その}如^{ごと}か^か

唐^{たう}土^ど明^{めい}の^ま世^{せい}小^{せう}ハ^ハ髻^{むす}成^{なり}剃^ひ事^{こと}な^なり^りし^しガ^ガ清^{せい}の^ま冊^{さつ}封^{ふう}を
受^うけ^け世^{せい}な^なり^りて^てその^{その}の^のま^まを^まく^くし^し。中^{ちゆう}に^に其^{その}如^{ごと}か^かに
芥^{かい}子^し坊^{ぼう}を^ま小^こなる^{なる}に^に剃^ひく^く中^{ちゆう}剃^ひく^く世^{せい}に^に化^まく^くを^まく^くし^し。

○剃髪

醫^い官^{くわん}を^ま五^ご官^{くわん}正^{せい}とい^いふ。茶^{ちや}道^{だう}坊^{ぼう}主^{しゆ}氏^し宗^{そう}叟^{そう}とい^いふ。ま^まの
脚^か茶^{ちや}湯^{たう}とい^いふ。上^{かみ}お^おか^かし^し。冠^{かん}を^ま被^かる^るに^に十^{じゅう}徳^{とく}の
如^{ごと}か^かの^の氏^し名^なを^まく^くし^し。

○家化

王^{わう}宮^{くわう}の^の圖^ずハ^ハ唐^{たう}画^がト^ト畫^えく^くる^る文^{ぶん}殿^{てん}お^おの^のま^まを^まく^くし^し。平^{へい}人^{にん}の^の如^{ごと}か^かハ^ハ日^{にち}か^かの^の化^まく^くる^る事^{こと}を^まく^くし^し。

屋宇之圖



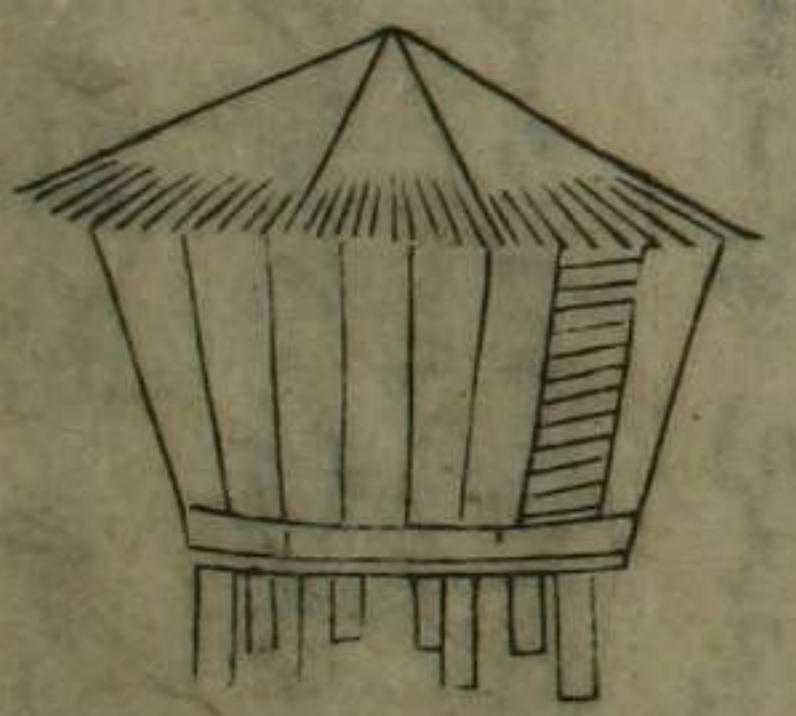
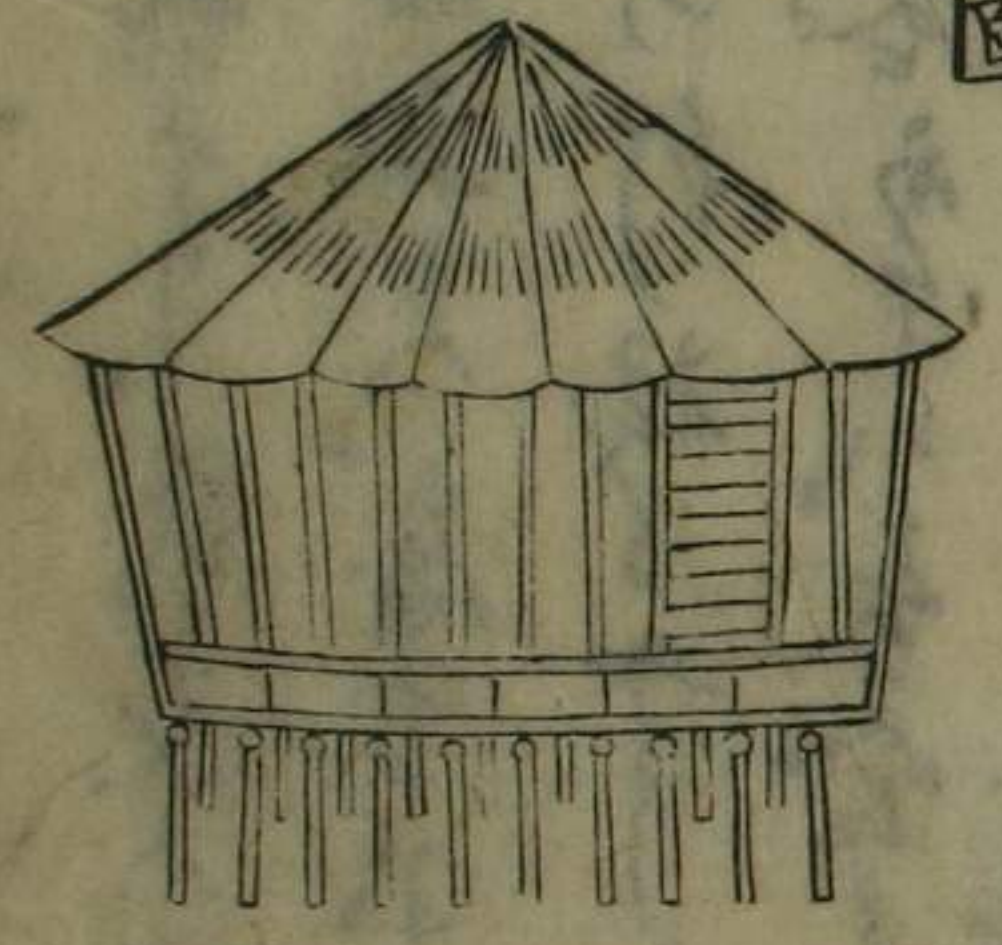
疏林

四

庫の字に口大棟ハ高さの如く。海風代避く紙
 以てなり。御所の尾をもちり。五ヶ戸。侍子。日本に
 目。柱ハ大寫。鬼界の如に産する。羅漢杉を
 用也。羅漢松ハ高さなり。價いひてまじし。木目も極葉
 〵。数百年蠹も。年紙麻也。從ひく。その光潤
 鑑の如く。壁ハ板羽目。小。粉箋を以て。是紙張紙。
 竹簾ハ極めて。廣く。細き丸竹。編簾。簾ハ挂。座
 の構へ築山。小。芝場。檜松の枝。あるひハ圓。或ハ方。又
 蒔込。多。紙柱。少。池を堀。魚を畜。水中に。少。石。紙
 立。其上に。鏡。蕉。其外。少。紙。木。紙。柱。多。紙。立。

大抵外圍ハ。礪石。紙。墨。く。作。礪石ハ礪石。大。家。小
 一。枚。石。に。磨。て。削。合。する。故。一。枚。石。を。切。き。て。り
 ぐ。み。く。甚。き。流。た。り。り。あり。寺。院。ハ。多。く。黃。楊。の。生
 牆。と。紙。込。て。り。たり。ま。ま。此。水。に。のみ。と。を。り。

米廩之圖



十里番と云ふ木代も籬と云ふ木代あり。木代は産物此部不載なり。民は竹の穂牆あり。米廩ハ廩の長四五尺。廩下不十六本の柱を施し。其間成人の行持ちやうに作り官倉皆かくのめし。村落あり。あかしく一亭を修り。米をこし中不花先。日紙をて守壁を修りたるん。

○罟賊圖説

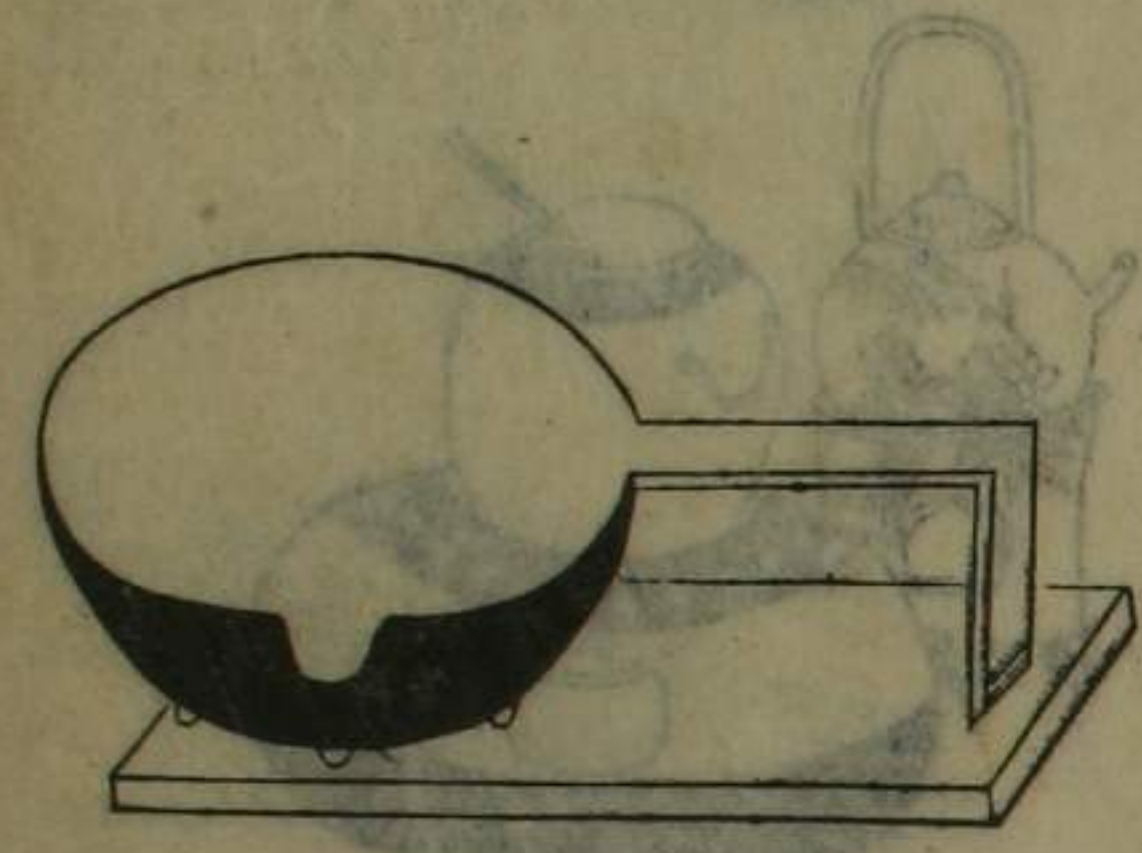
食糧の爲方。指板にりるまで。惣く日本の制不致不。王宮の給仕ハ里之子なり。二人宛採への技を名し。進退不並系流をりらめ。いふ

新伝より事なり。あり。定西法師傳也。天正年中。琉球へ渡り。一夏ハ菜ハ。一夏ハ表へて。道心となり。いふ事なり。琉球の習ひ。新傳より。いふ事なり。海く不所ハ食糧紙たる事なり。と紀せり。今もあつあつ也。

○女市

此國中过山といふ耶の海沿ハ早晚兩度市あり。商人ハ妙く女あり。商人ハ取のよハ魚蝦蕃薯。豆腐。木器。磁碟。陶器。木梳。草鞋等の廣物を賣。其貨物。何れも。首不戴。坡にや。山嶺を下。あつ偏む。賣買ハ日ハの錢を用也。古くハ徳武

焼味

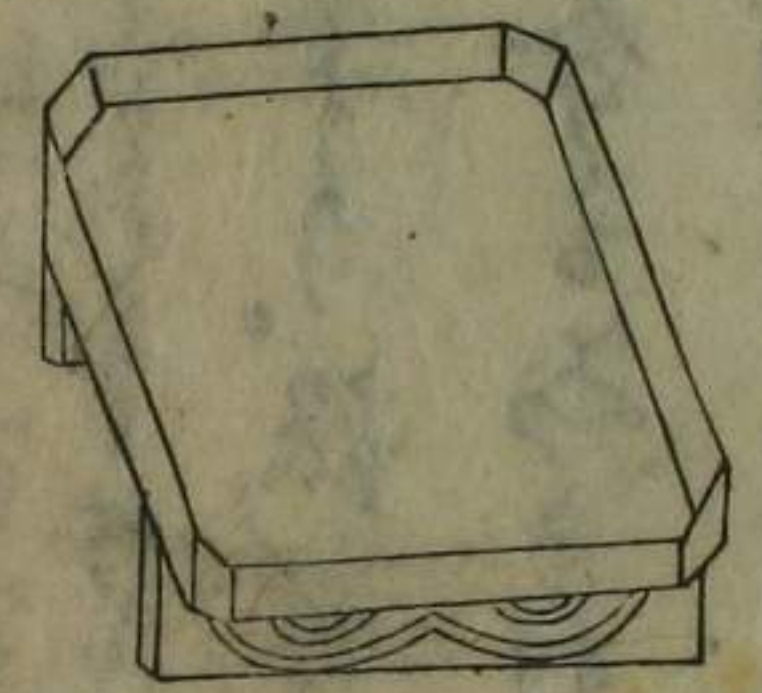


鍋

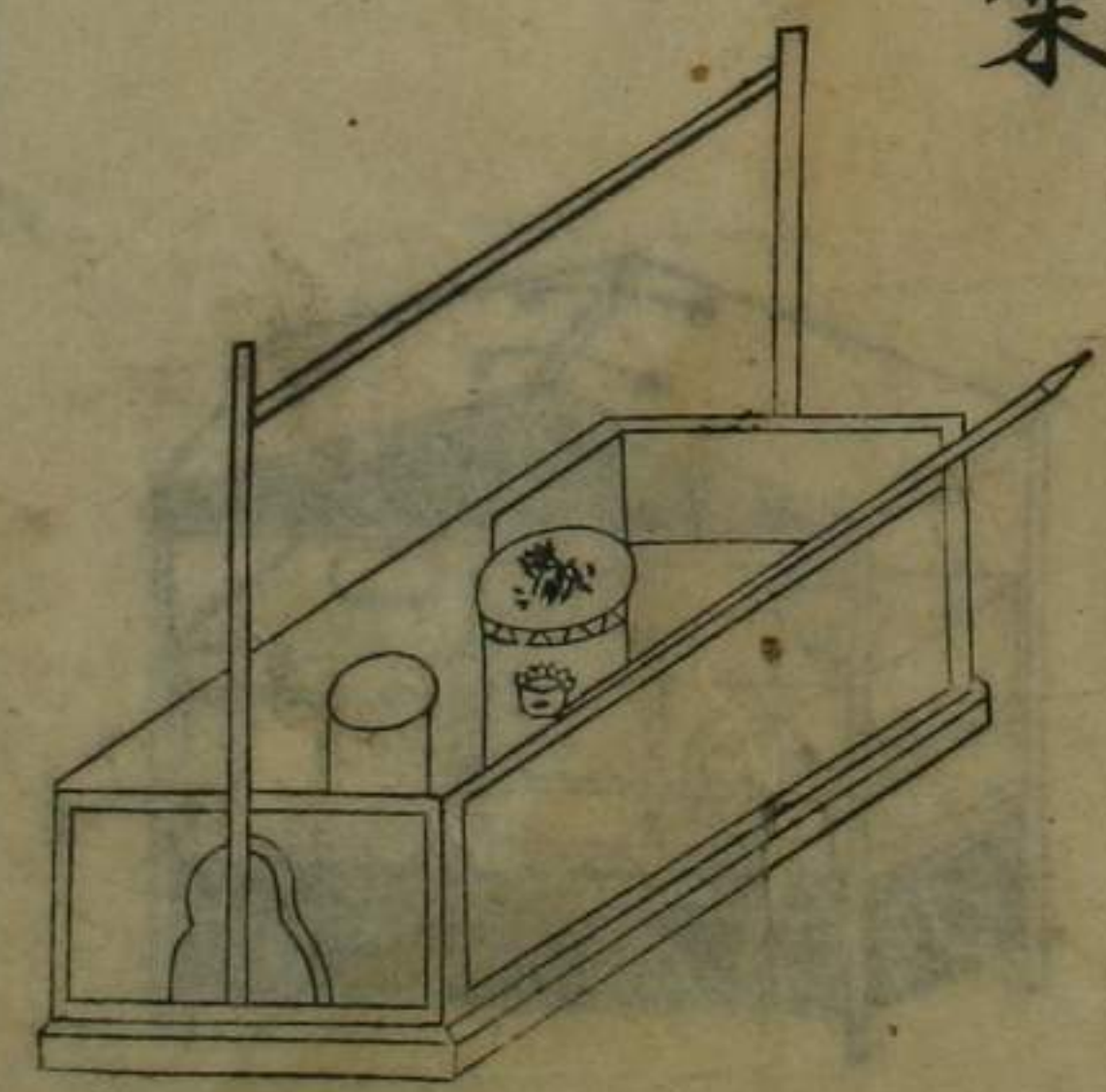
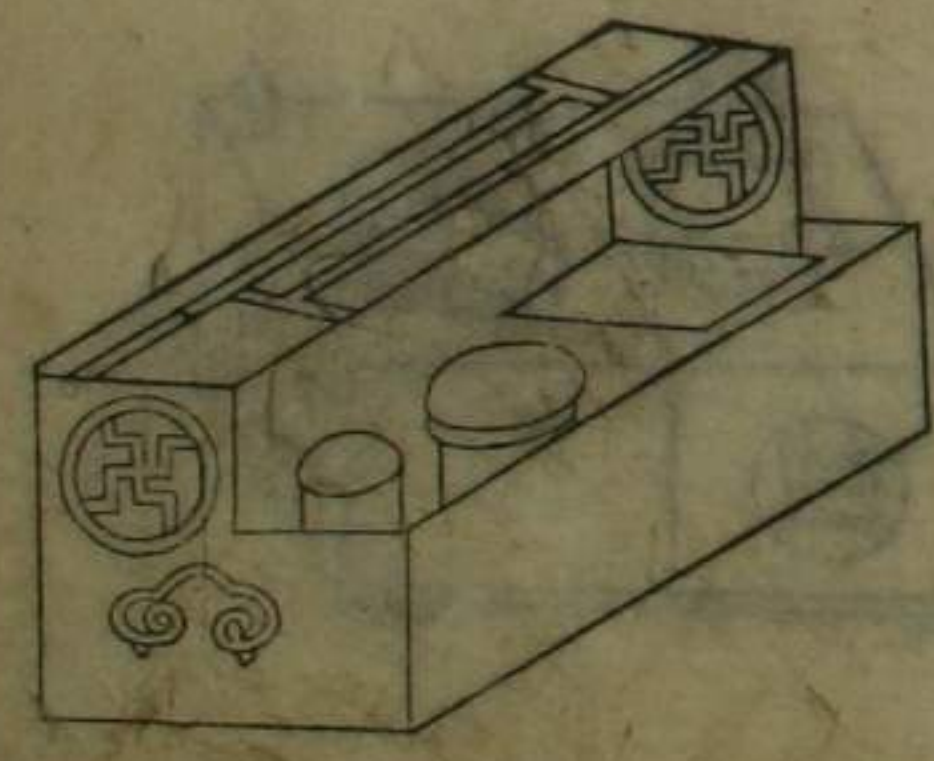
いづれも
鉄鍋
ケリ

膳

玩
玩
詠



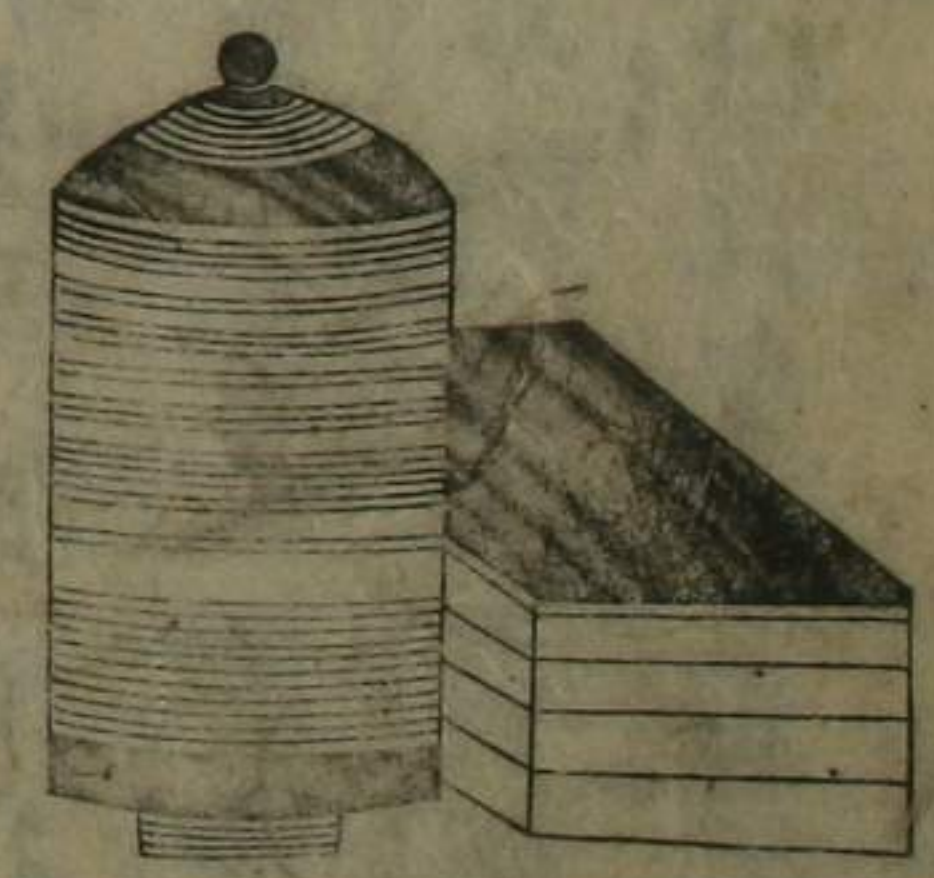
烟架



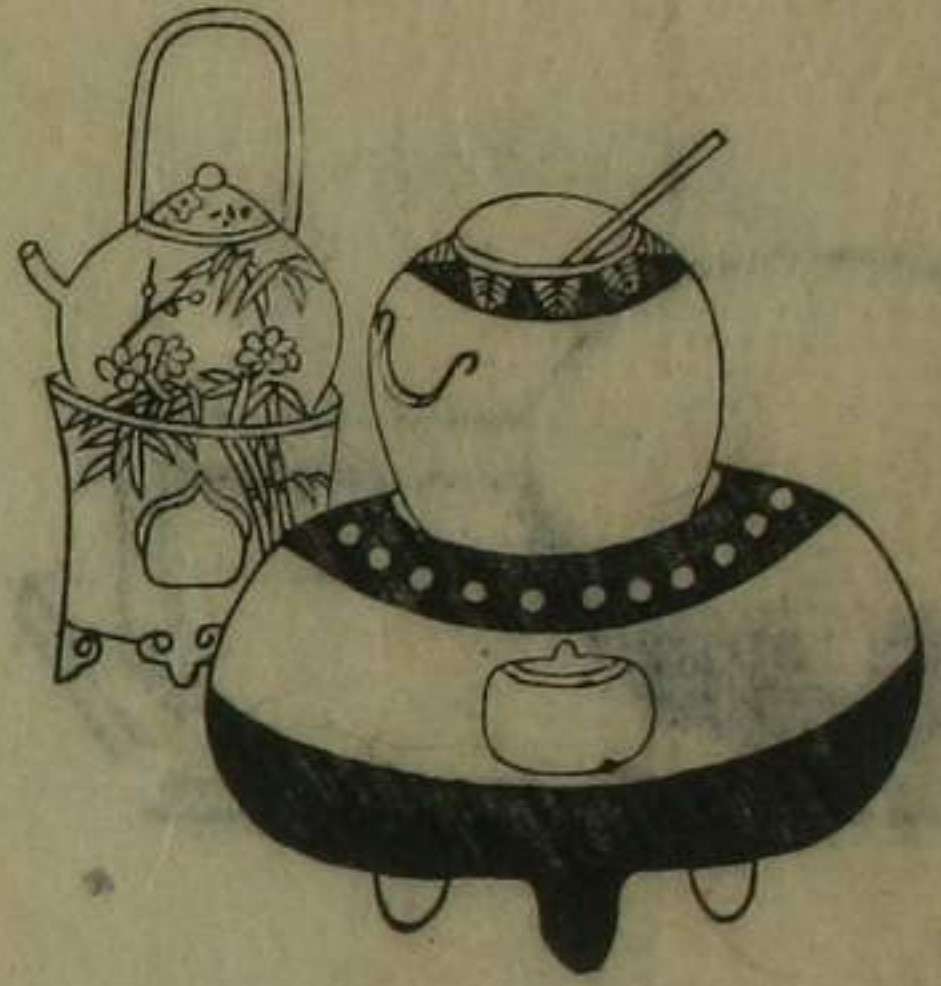
楨



食楨



火鑪



足ハ
彦
ツボ
角火取と
名付る
この
なり

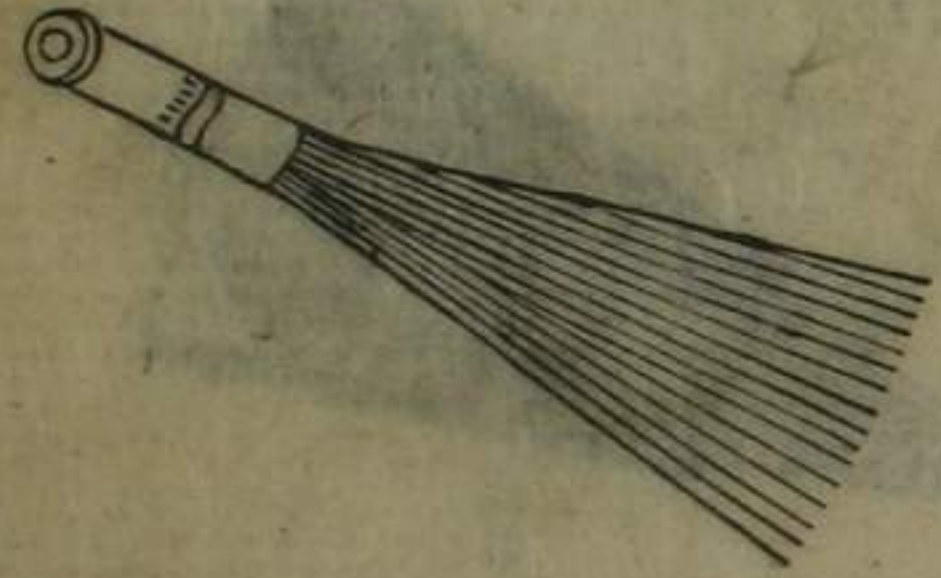


茶甌

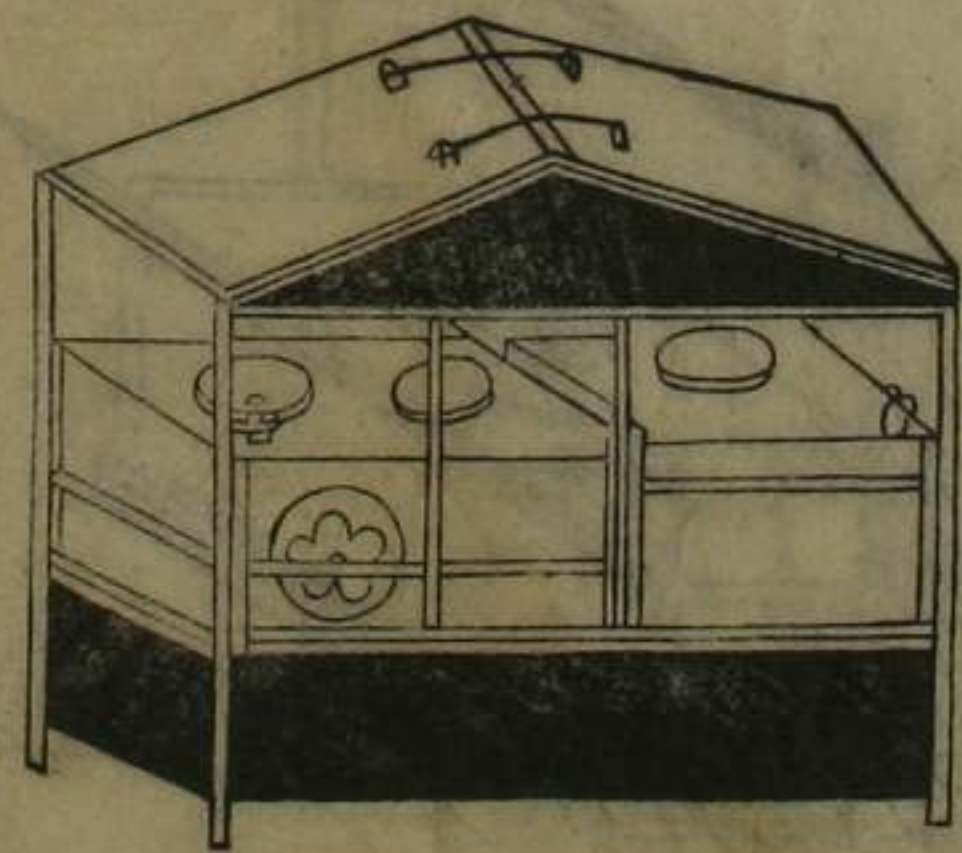
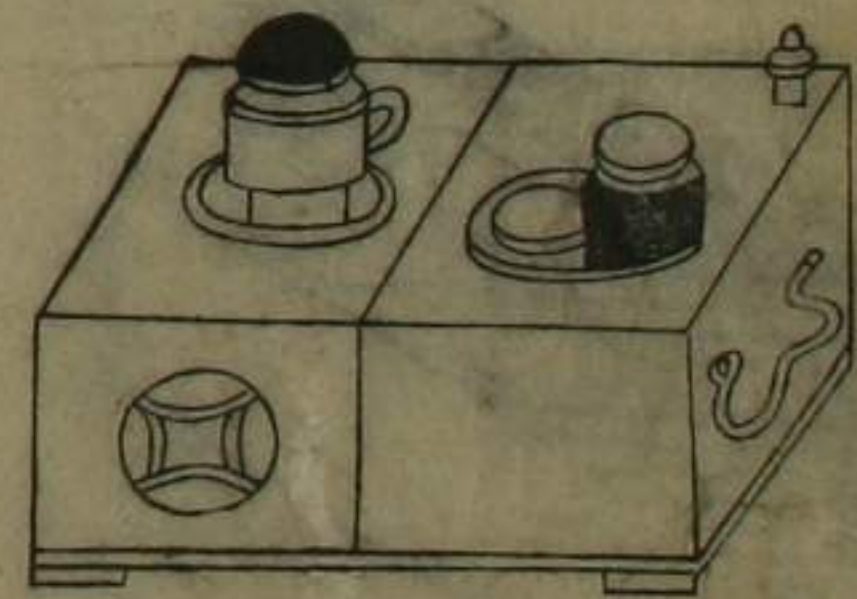
花
茶紙



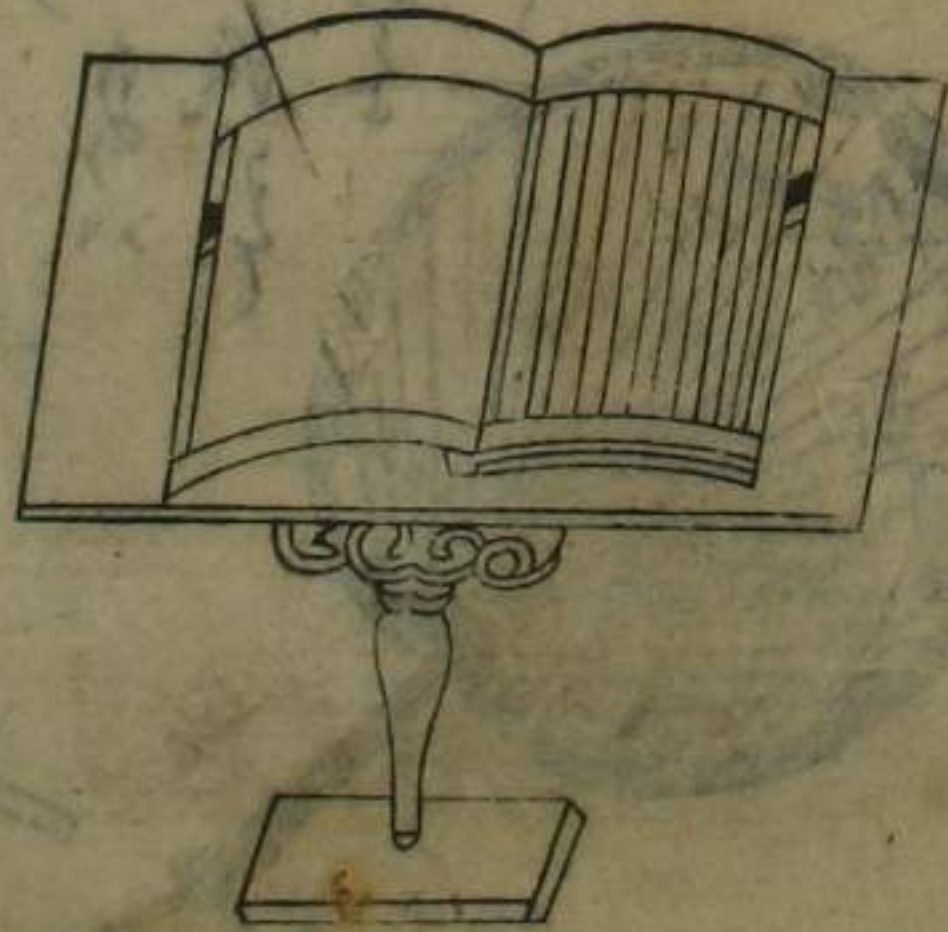
茶筌



水火鑪



書架

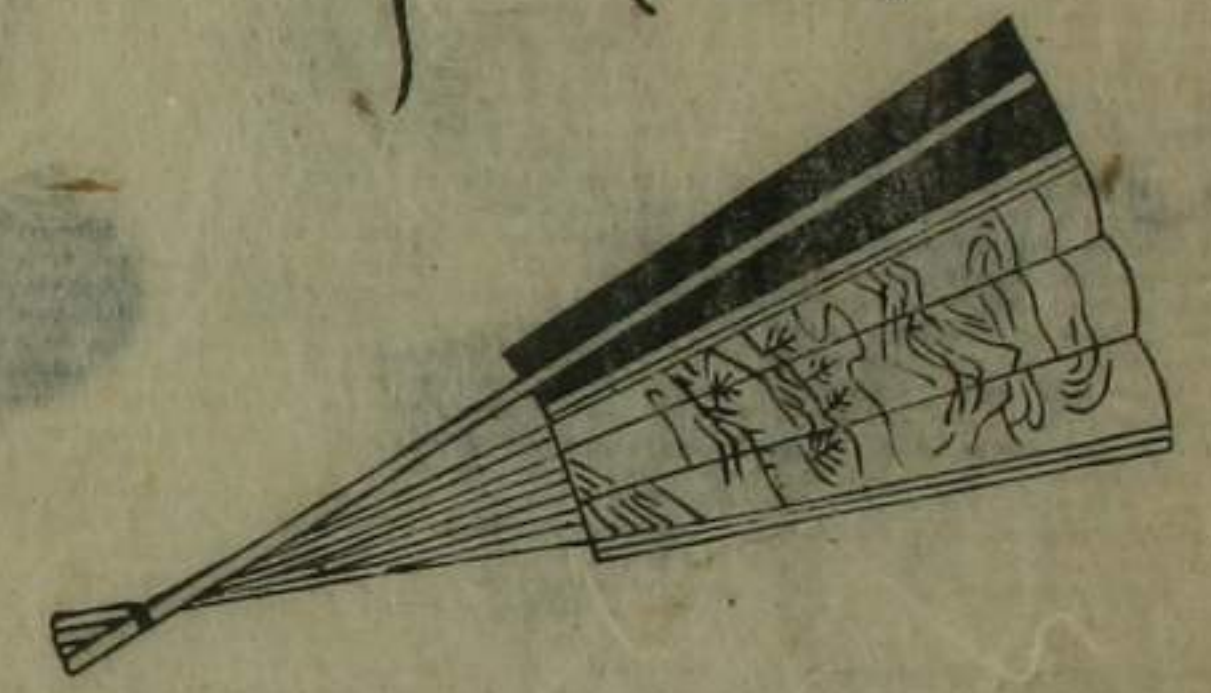
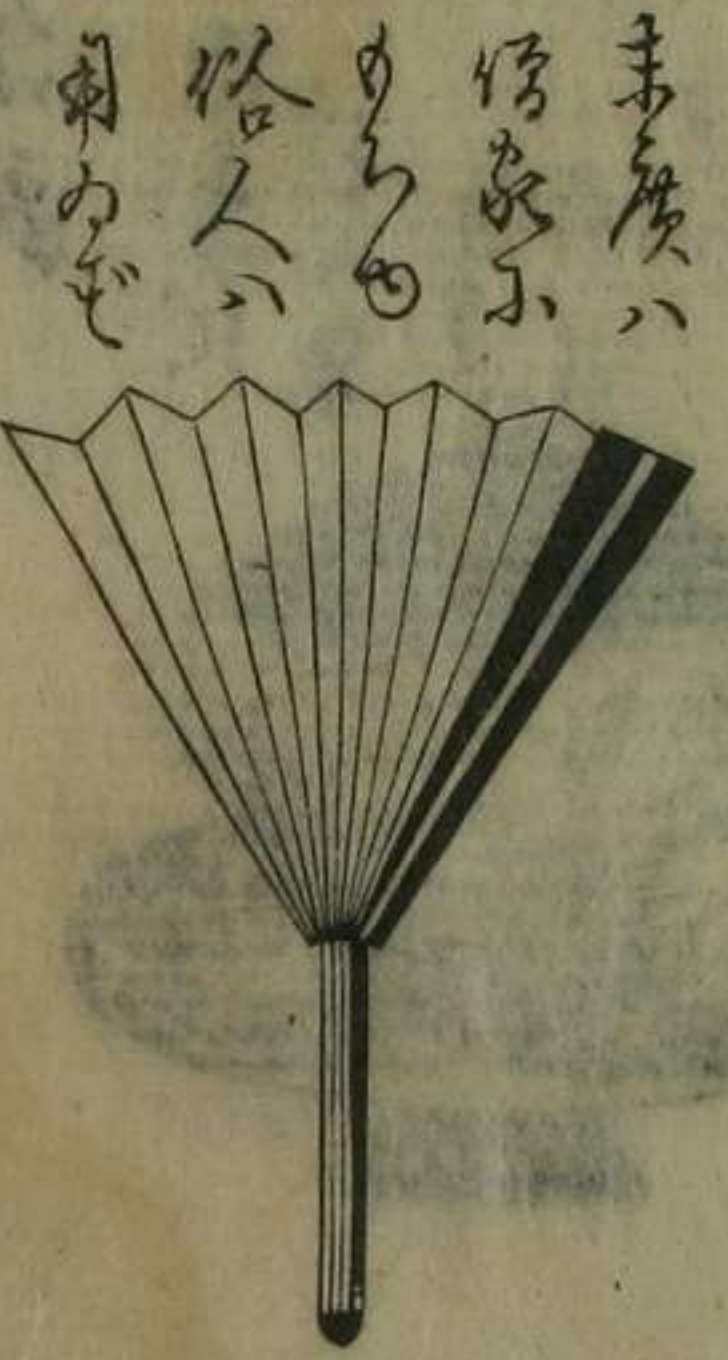


曲隱几



扇 二品

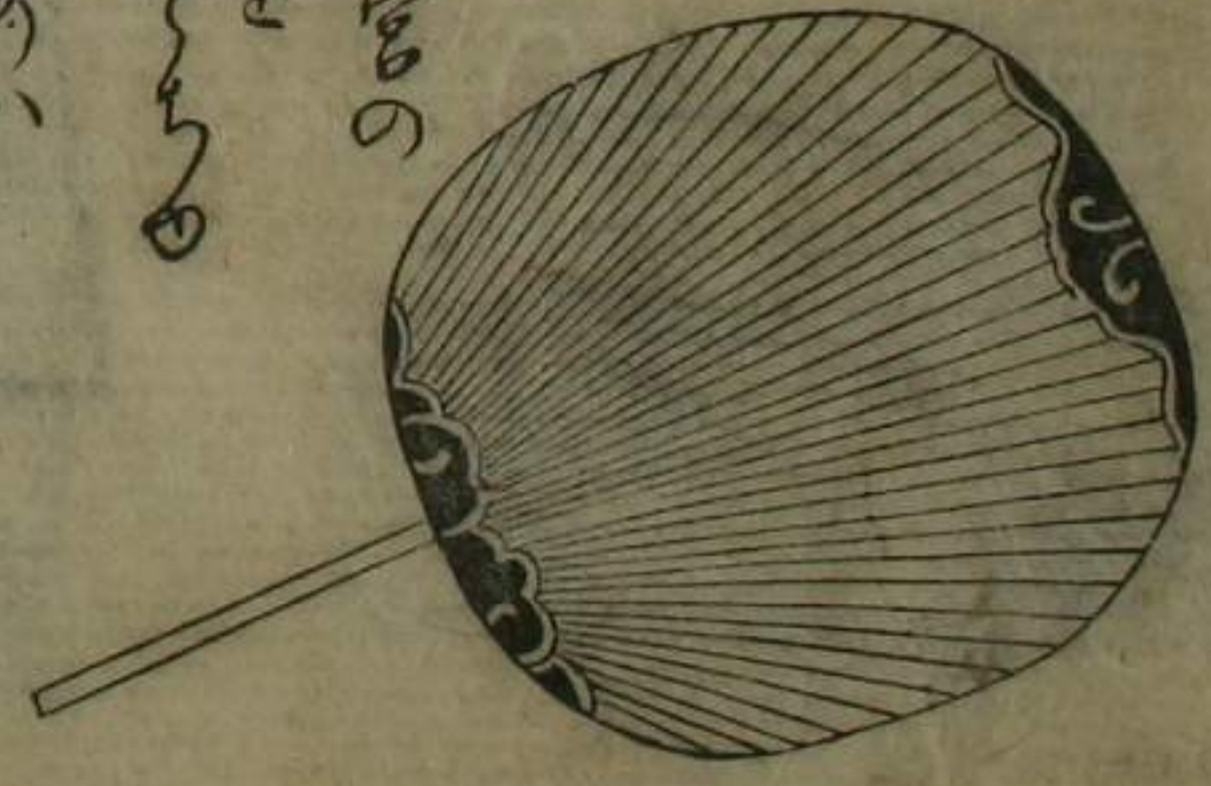
折扇紙
權子扇と
名づく
帯にさき
りゆかめ
め



未廣ハ
傍家不
ゆらゆ
俗人の
扇のぞ

團扇 二種

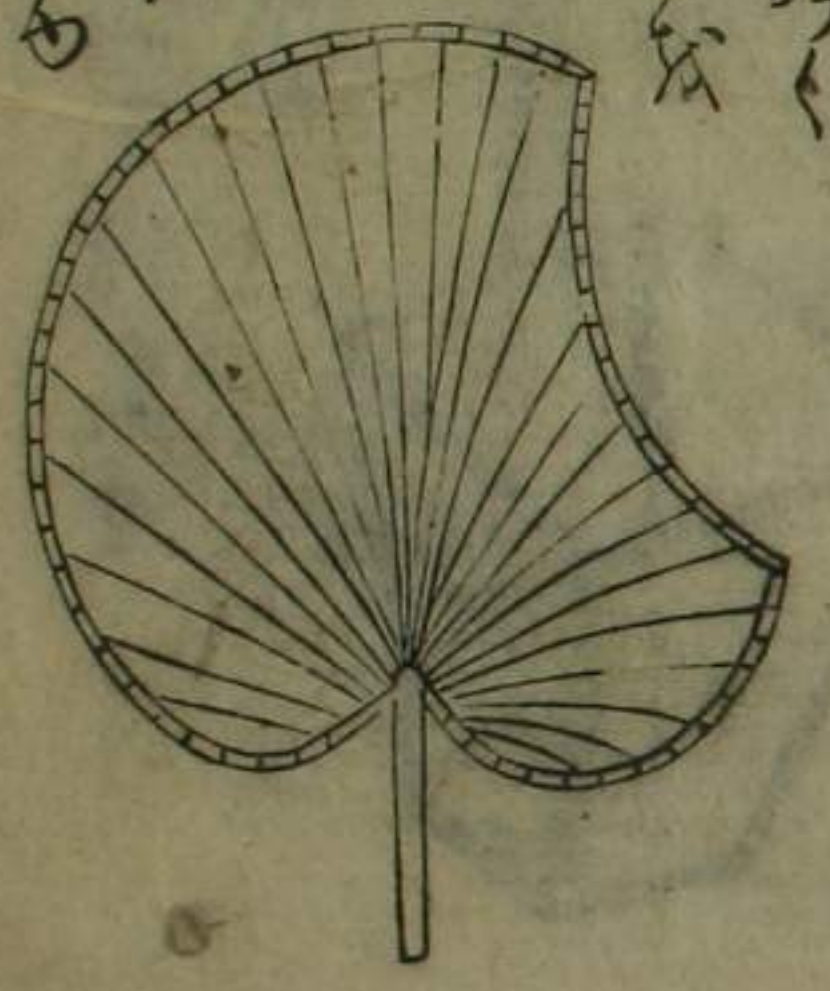
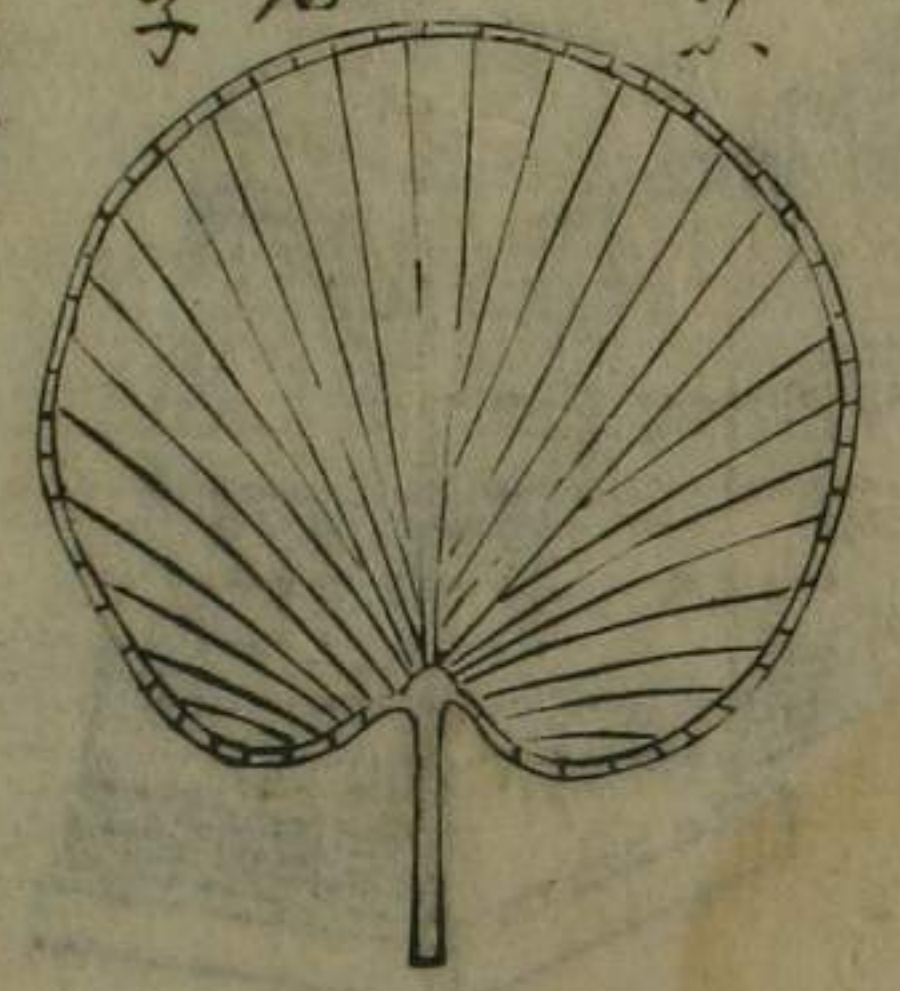
金泥入り
彩色紙を
ゆらゆら
玉團扇と
名づく王宮の
婦人らねを
常用の
白青紙紙を
法泥紙を
畫く



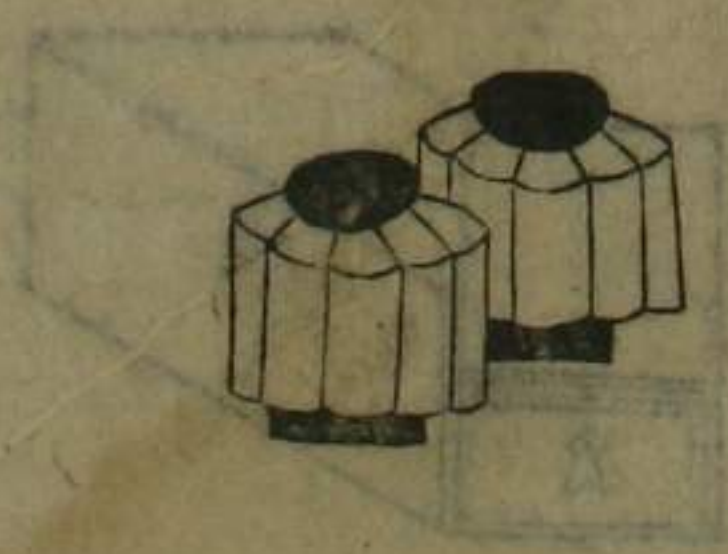
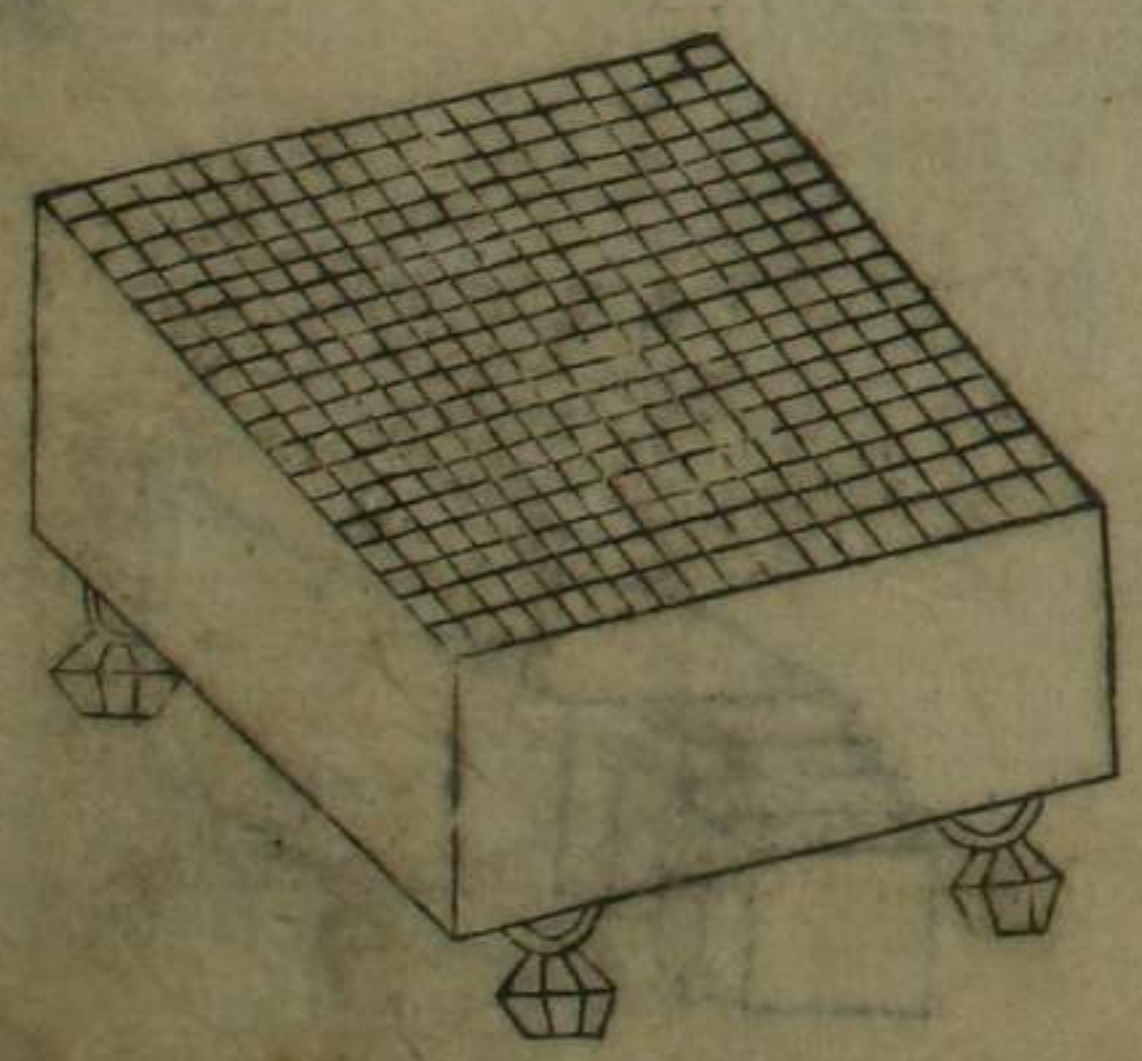
蕉扇 二品

此邦を
撫桐園
なり丸き
方以日扇
といふ男子
の扇也

其傍を鉄
半月つめ
ゆらゆら
月扇と
名づく
婦人
の扇也

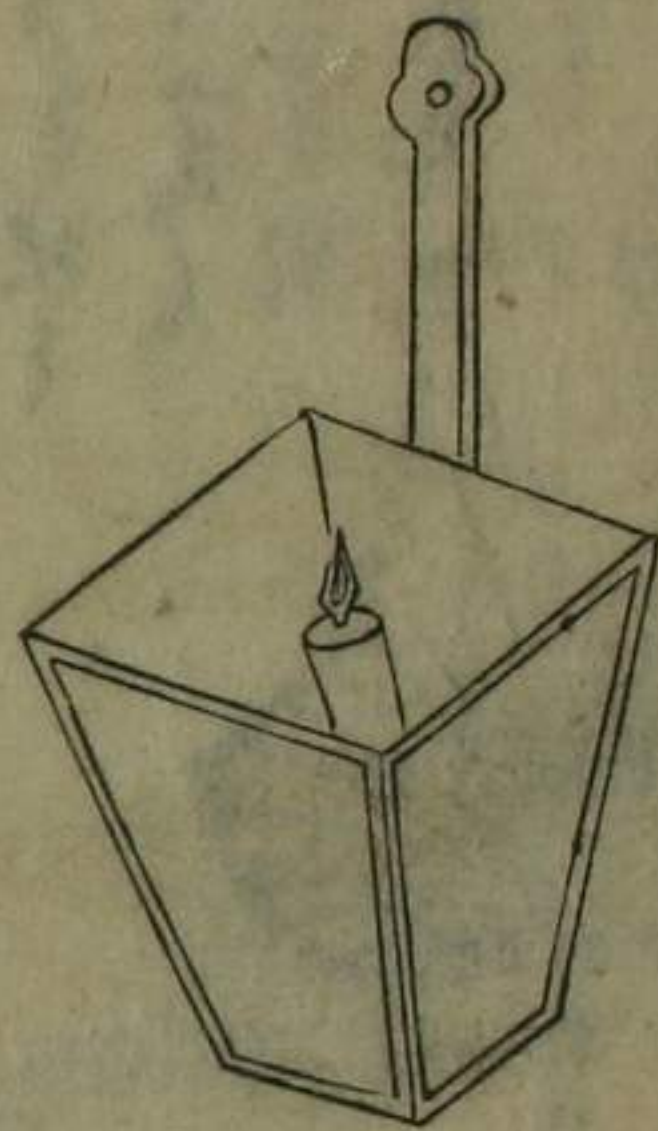


棋局



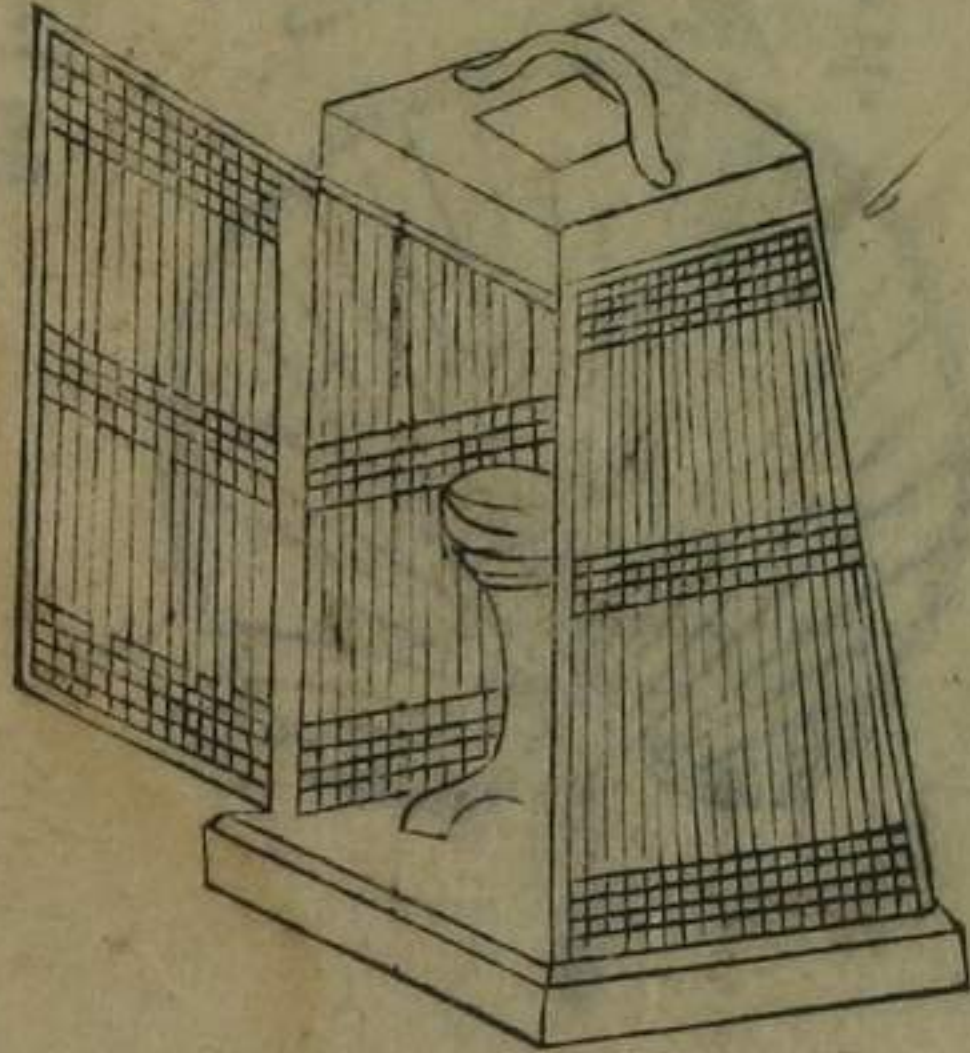
燭

白帟して法文中
あしく用ひ



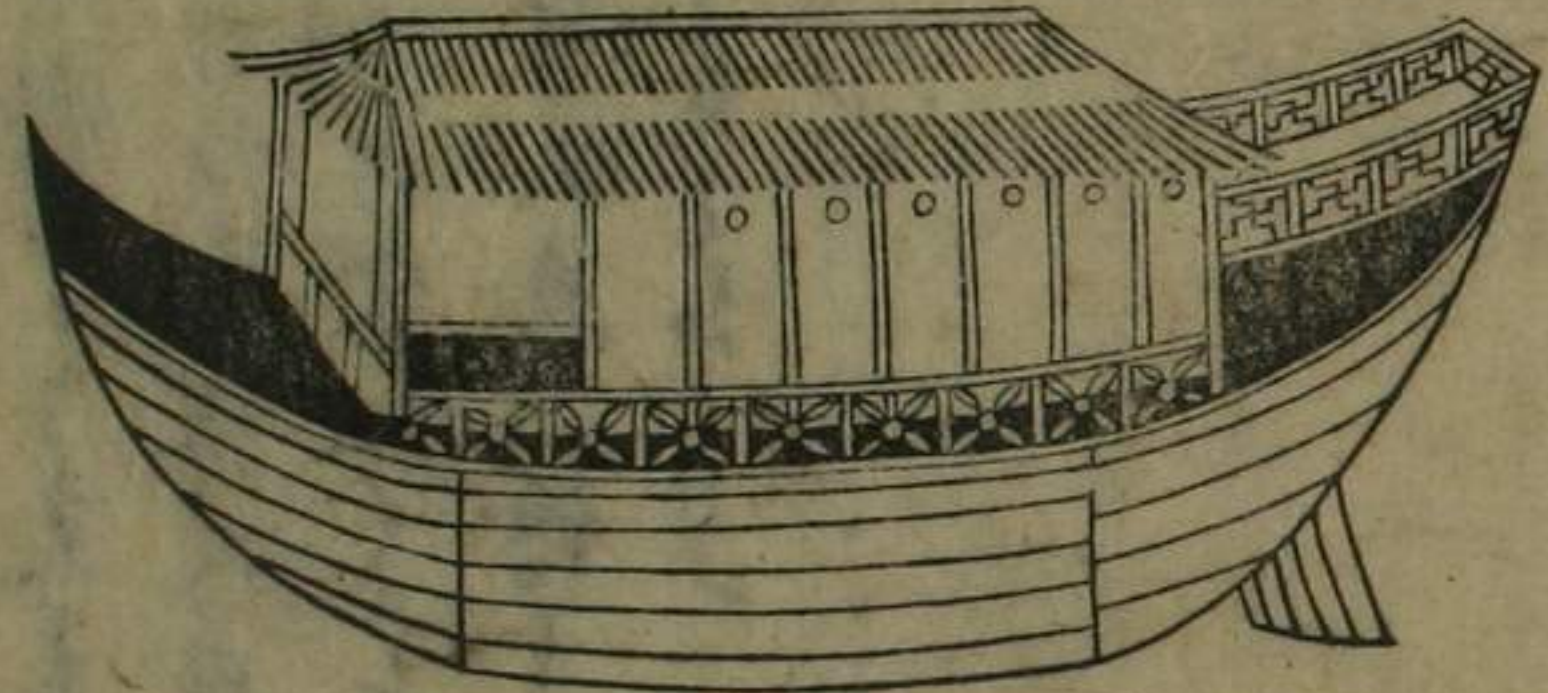
燈

あど
の制他
日本と
同
民向ハ
仲火を
用ひ

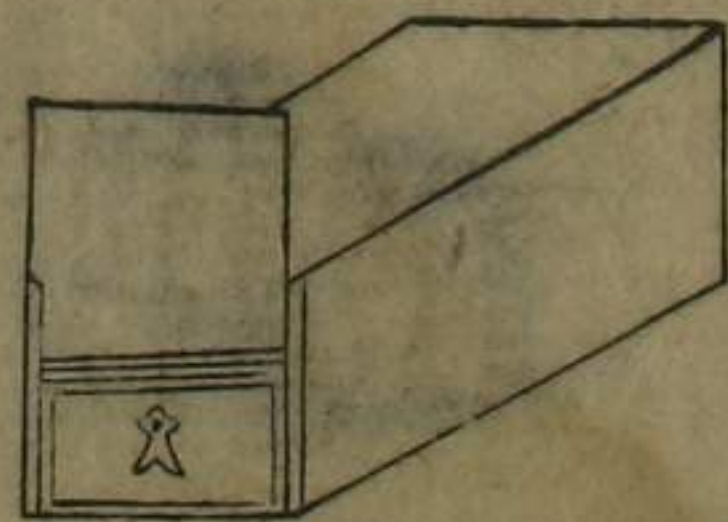
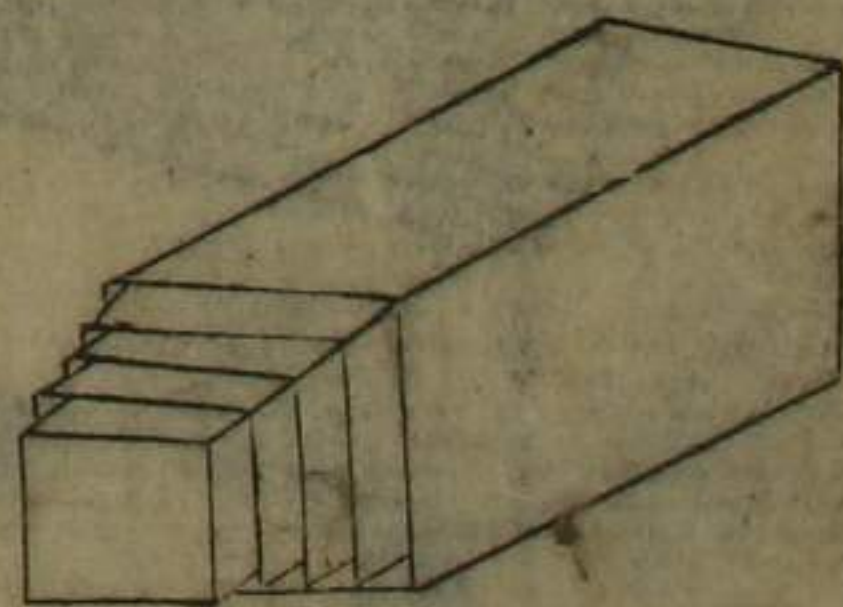


太平山船

唐日船(後海)
その船は福州
船の也(因を)
中の略くを
付するは船
つりまは船
の欄杆を
そのありを平
山つりまの
船のなりを
か欄杆
あり

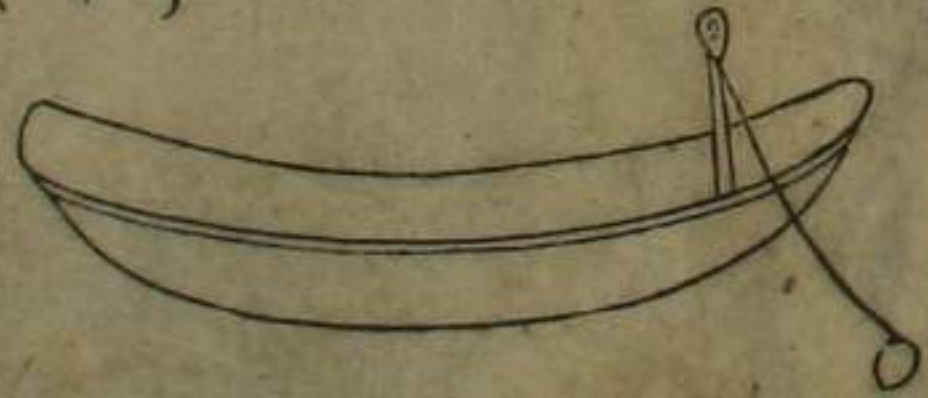


套枕 二品



獨木船

是ハ一本
の独木を
用ひて
舟を
作りし
なり
舟の
一
艘
なり
舟の
二
艘
なり



轎之圖

國王ハ肩輿アゲゴレなり文士下ハ
 皆轎カゴを用白夷シキク族の用也
 このハ雕篋ケホリの金物をお表ハ
 綿ワタとて包み裏ハ漆ウリを塗り
 ぬきふしつゝなり



飾馬之圖

馬ハ日本と稱する事なり。少飯シイヒは
 石系イシケイ成り不躑フヂク也。山ヤマ上ノを水ミヅを洗シはれ
 ハ地チ。是自然小昔コノコト去地イ列レハハあり
 此地ココ四季シキもともに暖ヌク氣キありて。ま
 夏の格カ々カのみあまふして新ニ歲サイ
 青艸アヲを食クふかまらむをた豆マメ成
 食クふもみ及ツびも。氏ウヂありて馬ウマの
 入イ用イなる時トキハ。新ニ年ネンへ
 用イ事コトなるが時トキへ放トクすなり。
 鞍イサナ澄スミをシやとも。日本ニッポンの馬ウマ具グ
 小コかカらラるルものなり。吟ウタ小コ紐ヅナ
 の下ノと。むかがいの。紅ベニの糸イトを
 けケらラ。丸マルきキ唇クハをけケらラ



流珠談

三十一

女市之圖



通宝。永樂通寶。唐土より此代へ渡りて通用せしが。今ハもあつてもあつても。只寛永通宝のこゝろ

○婦人の風俗

大家の女子ハ。金浪の簪^{えび}以^も月^づハ。民家の婦女ハ。玳瑁^{たいぼう}をく^く伸^のりし^も紙^{かみ}挿^さたり^も其^{その}形^{かたち}ハ。上^{かみ}不^ふ鬘^{まつ}する^も。外^{ほか}小^こ首^{くび}飾^{かざり}なり。脇^{わき}粉^{こな}をも^も月^づあ^あら^らむ。髪^{かみ}の毛^けハ。玉^{たま}を^を長^{なが}く^く。脊^せ丈^{ぢやう}よ^よ短^{たん}く^くと^と入^いん^ん。歩^あ行^{ぎやう}する^も。小^こハ。半^{はん}淺^{せん}代^{だい}履^{りゆう}木^も套^{そう}を^を履^はき^もあり。亦^{また}赤^{あか}足^{あし}と^とも^も歩^あ行^{ぎやう}する^も。あ^あは^はも^も有^あり。何^{なに}れ^れも^も手^ての^の拵^{かざり}は^は甲^{かみ}に^に懸^かる^る。拵^{かざり}の^の節^{ふし}の^の小^こ思^し甲^{かみ}を^を入^いれ

ま^まより^{より}丸^{まる}ぎ^ぎを^をま^まの^のま^まに^に入^いれ^る。女子十五歳^{じよしごじうさい}ふ^ふあ^あれ^る。計^{はかり}を^を刺^さす^も。墨^{すみ}代^{だい}入^いれ^る。ま^まより^{より}年^{とし}々^ざしく^く。小^こ増^ま加^かあ^あら^らむ。ま^ま浅^{せん}く^くも^も小^こ少^{せう}然^{ぜん}也^{なり}。三^{さん}才^{さい}圖^ず會^{かい}に^に。女^に人^{にん}ハ^ハ墨^{すみ}を^を以^もて^て龍^{りゆう}蛇^だの^の紋^い紙^{かみ}懸^かる^ると^と死^しする^もハ^ハ此^{こゝろ}事^{こと}も^も不^ふし^し。當^{あた}時^{とき}尚^{なほ}益^{えき}と^とし^し。國王^{こくわう}女子^{じよし}の^の懸^かる^るを^を止^とめ^めんと^と欲^ほし^し。衆^{しゆ}代^{だい}集^{じふ}り^りて^て評^{へい}議^ぎあり^し。小^こ上^{かう}古^こより^{より}の^の習^{じゆ}ハ^ハ今^{いま}又^{また}前^{ぜん}制^{せい}を^を改^かめ^めら^らし^めん^んも^も如^{ごと}何^{なに}なる^も。衆^{しゆ}議^ぎ一^{いつ}決^{けつ}せ^せり^りぬ^ぬバ^バ。國王^{こくわう}も^も為^な方^{かた}を^をく^く。其^{その}怪^{あま}不^ふさ^さく^く。何^{なに}れ^れも^もけ^けり^りし^しを^をん^ん。街^{まち}を^を往^{むか}来^きする^もに^に。天^{あま}を^を仰^{あや}む^もの^の布^ぬ代^{だい}も^も不^ふ持^{もち}し^し。良^{りやう}家^けの^の女^に人^{にん}なり^り。衣^えの^の襟^{えり}も^も紅^{べに}子^この^の緑^{ろく}紙^{かみ}を^をく^く。女^に人^{にん}なり^り。小^こ思^しを^を抱^{かか}り^り。小^こ思^しを^を抱^{かか}り^り。小^こ思^しを^を抱^{かか}り^り。

流珠談

よて小児の腰紙とらへ。腰骨かけく歩むなり。
女市の島あり。定西法師傳ふ云。琉球ハ弁天の島
なりとて。男子より女紙殺ふと云なり。

○嚏を好む

琉球人の壽命の業なりとて。嚏を好む紙好む。
客不對とらるも。紙條紙鼻孔へ入るくありと云
を好む。薩州の人は好む。

○奇舞

王宮ありて。奇舞を身行とる時ハ。五と又四
面の舞臺紙造り。四方小幕を張り。樂人の

紅衣縁衣を着し。又くの中紙裁き。蛇の
皮ありて張る三弦。提琴。笛。小鑼。鼓など紙持て。
二行小ならび。ありて。樂譜紙歌へを。皆く有
る。階をの幔を裏げ。舞人出るなり。

○小童四人。朱き襪紙履。五色の長紙衣を襦き
し。頭子黒皮ありて。仰りて。朱鍔の付たる
を戴き。廻旋場ホ登り。樂人の方へ向ひて。紙を
樂土其々紙やう。朱紙を臺の上へ捲つけ
ありて。童子らけりて立上り。足指子を曲節
に合せて舞ふ。此紙は舞と名付く。

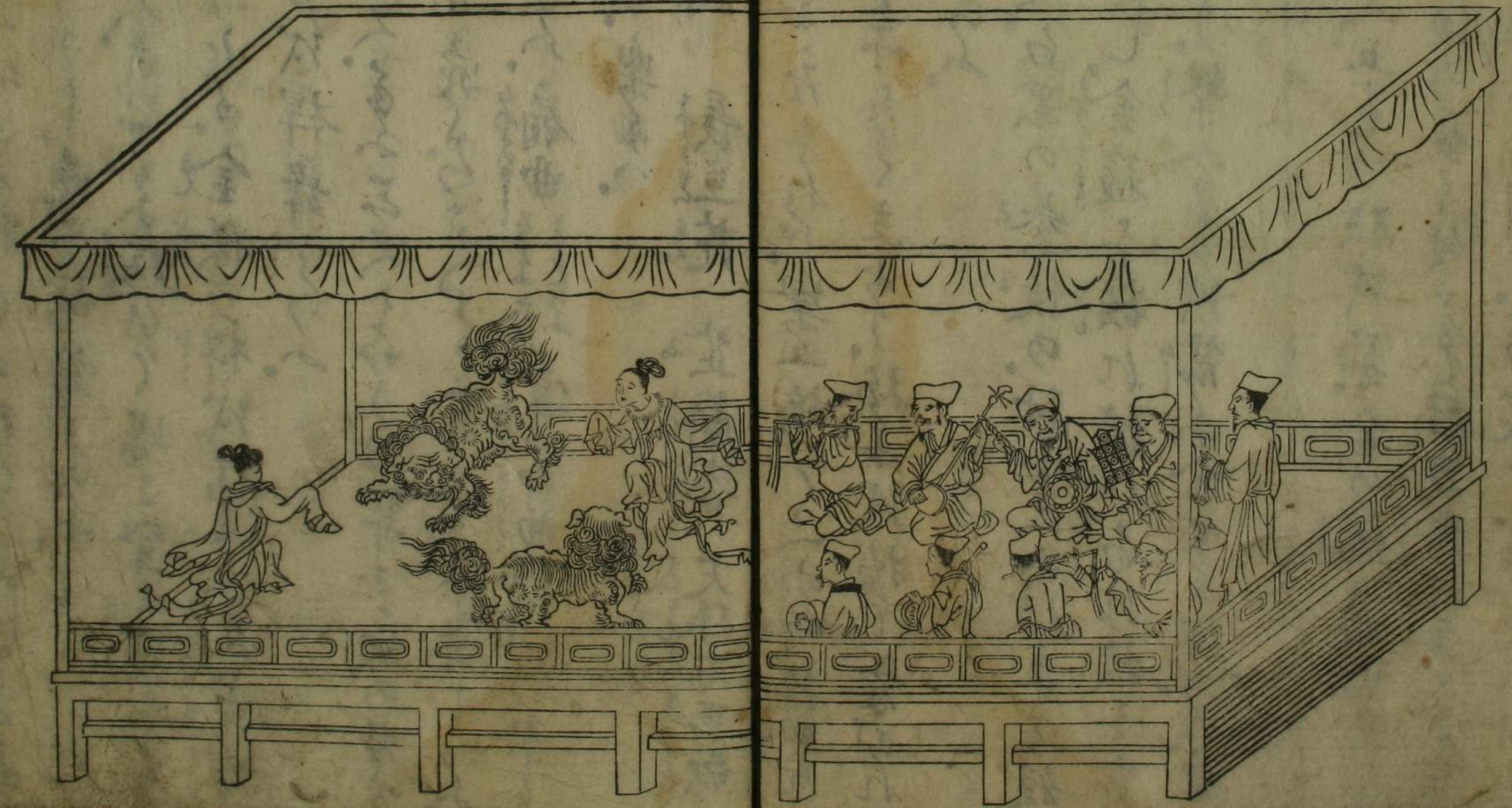
○小童四人。金扇子に花を飾りしとて紙戴き
 朱帕あうまをちまきを飾りし。五色の衣紙いしいふも花やうに
 着ま好ふし。又の花紙はなし付つくも索あその輪わよわるるを
 項かみかた不ふをとて。場ぶち小こ登のぼり。其その索あそ紙し多た不ふをとて足あし子こ
 を踏ふく舞まり。其その舞まのめし。又また紙し多た不ふをとて
 花索舞はなすまといふ。

○小童三人。頭かぶ不ふ能なを飾り。綿わたの半なか臂うで
 を着まし。小こ花はな藍あざ紙し肩かた不ふをとて場ぶち小こ登のぼり。
 前まへのめく索あそ不ふ藍あざ舞まと名なにいふ。

○小童四人。五色の衣紙いし着まして場ぶち小こ登のぼり
 樂工がくしの前まへよよななりが。樂工がくし強たかく。小こ竹たけ拍ぶち四よ片ぺ
 を授さづく。童子こども立たり。揚あ子こ紙し拍ぶちて家いれ
 紙拍舞しちぶちまといふ。

○武士ぶし六む人にん。白しろ黒くろの基もと糸いと紋もんの。袖そでを大おほ小こははきる短たか
 き衣紙いし着まし。金きん箍くわを額ひたいに結むすび。白しろ紙し杖じやうを突つ
 て場ぶち小こ登のぼり。撃う合あとと紙し節ふし小こ合あせと家いれ。武舞ぶま
 といふ。

○小童二人。五色の服紙ふくし穿き。金きんの練ねりの四面よつ小こ登のぼり
 け。朱あかまま紐ひもの長ながく付つくを拵た右みぎに立たて舞まり
 ぐ。二足ふたあしの獅子ししを引ひて。場ぶち小こ登のぼり。獅子しし紙しねねを



琉球 球 樂 舞 之 圖

かゝる舞ふ。獅子ハ行くのねひをけし。も真
ある曲をうり。是を球舞といふ。

○小童三人。さるる子粒ひて。場を登り。樂人より
一尺むかりたり。金様の桿式法を。交撃す。

舞ふけ曲。或桿舞といふ。

○小童四人。さるる三尺むかりの竿。小花の付る
を。各一本宛づらう。舞を。竿舞といふ。

此外舞。扇曲あふのまじく。掌節曲てのまじく。小童三人。あ

ふ音あり。樂あり。

太平調

長生苑

芷蘭香

天孫太平歌

桃花源

揚香

壽尊翁

是等の外。数曲あり。此内。桃花源。揚香。八明
樂あり。壽尊翁ハ。清朝の樂あり。又神哥と
いふ物あり。日本の式三番の如く。國樂を奏
する始。一老人の形。お冷場を登り。此
曲を奏ふ。は。混沌のく。世々御し。る。
神聖天孫氏。世々の國王位。不登。毎小形を
現して。靈祐をめん。さかち。迎神の歌。式
製しく。わつて。あねを歡樂ん。後世より。て
神三むく。形を現せど。お小神代より。造り。る

琉球記
唱^カ哥^カを傳へて。玉王即位の時々。格別の儀式
あり。時々曲^カ代^カ行^カふ。神^カ歌^カを唱^カつる。同^カハ
も子^カを^カ出^カす^カと^カん。

○餽優

舞^カ樂^カ不^カ續^カきて餽^カ優^カあり。其^カね^カ云^カふ。龍^カ龜^カ
と^カら^カる^カ兄^カ弟^カの^カ事^カ。父^カの^カ仇^カ代^カ復^カし^カる^カ古^カ事^カ
あり。日^カ本^カの^カ多^カ我^カ兄^カ弟^カの^カ款^カ討^カし^カ鬃^カ鬃^カの^カ
也。昔^カ琉^カ球^カ國^カ中^カ城^カと^カら^カる^カ所^カの^カ按^カ司^カ毛^カ國^カ鼎^カと^カ
し^カる^カ人^カ忠^カ勇^カありて國^カ代^カ治^カむ。其^カ處^カは勝^カ連^カ
の^カ按^カ司^カ阿^カ公^カと^カら^カる^カ者^カ。若^カく^カと^カら^カる^カ郡^カ馬^カと^カら^カる^カ城^カ

小^カなり。國^カ王^カの^カ受^カへ^カ目^カ出^カ度^カかりし^カも。甚^カ者^カ後^カ
を^カ極^カり^カて。内^カ公^カ毛^カ國^カ鼎^カを^カ忘^カけ^カる^カも^カ。年^カ古^カ
代^カ切^カり^カて。國^カ王^カ不^カ終^カを^カか^カめ^カる^カ毛^カ國^カ鼎^カ叛^カ逆^カの^カ企^カ
有^カと^カ奏^カ聞^カし^カる^カ。國^カ王^カ且^カ驚^カ馬^カと^カ怒^カり。一^カ急^カ乃^カ
今^カ味^カも^カ及^カば^カず。阿^カ公^カ不^カ軍^カ兵^カを^カ授^カけ^カ。毛^カ玉^カ
鼎^カを^カ攻^カ討^カす。毛^カ公^カ無^カ失^カの^カ罪^カを^カ致^カす。と^カら^カる^カも。
阿^カ公^カ一^カ急^カ不^カえ^カあ^カね^カむ。今^カハ^カ是^カを^カと^カら^カる^カも。
遂^カ不^カ自^カ殺^カを^カせ^カな^カし^カ。毛^カ公^カ不^カ二人^カの^カ子^カあり。
兄^カを^カ鶴^カと^カり^カふ。十二^カ歳^カ才^カ代^カ龜^カと^カり^カふ。十二^カ歳^カ二^カ子^カ
あり。伶^カ俐^カなり。父^カ毛^カ公^カ年^カ日^カ室^カ淑^カ二^カ振^カを^カ以^カて。

且つに撃劔を教へ小腕なうとを業におい
 てハ大人少もかゝる思程お仕立ける。此は極ハ
 母小従ひして山南の查國吉とつる親屬の方
 にまけるが。父を公阿公が誘へる小依る。討手
 を川史無意の形取逐うと聞天小仰ぎ地
 小伏て深注せしが。深取拂ひて母に誘はるハ
 父上の室初ハ今史勢を返すぬ後おれハ
 く兄弟面袖取之知しまぬを幸に。恐びよを
 て阿公を討た。父の仇を復さんぞ存ぞるあり。
 然ハ父上の秘蔵ありし二振の宝劔を揚
 りんと。ちひさしくおれハ母ハ其もお忘れ
 けかげうもまじしつる兄弟かか。してくその
 めく。二振の劔取あつて登しとて。みかして
 分ちあふ。兄弟勇人して暇取も。父の紀念の
 宝劔を帯しけ。身をやらして勝連おる。
 父の仇取を知らぬける。あも阿公ハ目取を悟か
 まし。毛公を見ひりれた。今ハ経うも懐かど。去
 の野はら取逐へんと。従者取川連出ける。兄
 才あくも聞出。宝劔を懐か。透るも
 あらばと伺ひる。阿公ハ二人の小を以毛公う

流家集

〇二二

子とて、父も知れど。あちりしき小冠者も、是
 へあつたつと。孫之招き下りせ。又身が容良
 の乗りにきに公認れ。叔叔の酒代修けしが。
 酔真のあり。着せし衣を従。足手小かち
 ちく。行も足むやちひけん。佩しう所の酒を格よ
 わふ。鶴今ハ能居たりと。才又目くせし。そは
 を按ふとてをぞ。つとあつて阿公に経行。わか
 代終とつふ。汝が徳も修く自教しし。も
 毛國昂が二人の子をり。父の恨切もひ知と。柄
 と通れ。夫も通れと刺通され。ありとらふ

まふふ城。返り刀よ首打為さ。酔後まきし
 流者ども。此袖代えて行を消し。ちを下と
 狼狽も。二人の童子ハ透向となり。四方八面を切
 てり。悉く切殺し。かそ城遂ぐる紙一層。は
 又撞魔とつ不狂云あり。是ハ編曲の道成寺よ
 似たり。中城の姑場村とらふ所の農家ハ陶姓
 なる者あり。一子ハ松壽と名けり。齡まきに
 十五歳。絨小端藤の美少年たり。け國の都
 首里小師ありて。常又社通ひて業代受けり。
 一日浦添の山徑ハをりける時。思ふふ及ひて

成先ひ。こゝぬかうさぬに踏迷ふ程よ。はまに
 昏悪まかりてあいろも分ぞ。小竹と折く杖
 とをし。其はよけはもたどりし。が。不のう小
 火影のるえりぬ。松壽ははははと笑して。
 火影を傳り不路はと。幸うとく其家よ
 る。一夜の暮り成求りり。此家の之ハ穽人
 みく。一人乃娘を捕て。山家よけまて。天
 性の嬌態あやまきすてふあてやうたり。年ら
 うに十六歳は叔父ハ穽よ出。只一人を穽居て
 ありらる。門よ人のおとをひして。死ぬゆゆふ

さるふひさる者をも傳ふ。情よさる宿たぬり
 こしと。いふ伝もあきられ。娘はうら
 のさひりぬも。折やし父の事とつひを。一よ
 定めかね。いふまじいけあき人といひ。時よ
 し。人よかりぬ。さるまは父のよあもあじ
 と。門の戸閉き。く。産んともあひ。情はさう
 とをふせし。松壽が涙のいり。く。さふ。心
 めれ。幸ふ筋と挑りぬ。松壽と。あ
 きせぬ。い。う。ま。い。け。か。を。睡。も。や
 けし。あ。う。始。め。の。ひ。よ。せ。あ。り。て。や。を。し。く。と

珠玉言

三十一

抱き付バ。相尋尋まき。衣代振ふて起上る。路今ハ
 恨のあむ。路兩人出せし。目ト眞
 途一ともふりと。彌具代。みく飛る。相尋ハ
 魂九天小飛。足踏をたぐる。此代して。足代そ
 不返出を。何ふまきと追まら。そのまきより
 飛るの如し。松壽やうく。返延く。此山の
 曲にあら。万壽寺といふ寺ふ。路入ふ。うく乃
 中代おぼれ。住持普徳といふ僧ハ。行徳
 いみ。女まき。僧をりり。女。まか。つら
 松壽代。滝樓へともおひ。大鐘の内ハ。伏ふ。あ。

三人の流弟代して。其傍也。看守しむ。まき
 有く彼路。深あらう。まき。三人の僧。問。
 何れも。知ら。神。まき。戯。歸ら。ま
 ん。松壽を求む。相尋の如く。泣。ひ。
 相も。行。路。今ハ。心。
 易し。件。流。を。返。まき。其。物。山。ま
 寫。き。り。女。早。く。も。跑。度。り。髪。振。礼。一。形
 相。愛。し。ま。き。人。ハ。け。流。の。内。ふ。ま。き。人。ま
 と。鐘。の。内。へ。ま。き。住。持。尋。ね。諸。僧。と。何。ふ。
 流。代。續。り。て。ま。き。を。行。く。行。法。の。強。ま。や。う。ま。ハ

女の心は清浄へ上り。女の鬼女の相を現はし。
 又を以て鐘の内に倒たふされ出。法を
 目をそめておこる。情をかしも心づかばこそ。動
 こさず祈りあり。一々天候あまの曇り震動
 雷電らいでんとまぬしく。女ハ其情悪魔あくまとてなり。秘壽
 を秘ひんで走り出。それまゝ一馬ひつばの狂まをた
 け二事ハ皆百年以前。琉球玉中たまなかつも有し
 古もゆたうとあり。け外ハ皆唐土たうどの方言妓
 女おんなハ真形まがたとてなり。又日本の情樂じやうがくとて
 情じやうく舞囃子まわしをてゆも真形まがたと。義太夫ぎだうぶも真形まがた
 好みこのみ芦荊あしけいかよの節ふしも真形まがた。終つひて清々と
 なり。

○琉球歌

祖練先生それんせんせいの琉球聘使記りゅうきゅうへいしきに云。三線歌さんせんか琉曲りゅうきょく也なり。其
 奇まじにいづく。
 希有きゆうゆうなり。ほこら志しやや者あり。たふさたふさか
 程ほどまれ有哉ありや。たて海うみ彩いろをの具ぐはほごであるあり。かかのか
 花はなのな。津由つゆはやととここをを常とこににあり
 中良案ちゆうらあんふ。此こ奇まじハ生者せいじや必滅かならず乃意なりを奉ほうとせむ。
 いうさぬめも挽ひ奇まじを記しらる。又また謡奇うたいまじハ載のせられらる。

世乃中の習ひ。いりもうごぶらめ。残る人ふいあ
すらのぐま。

又娼妓の唱ふ歌あり。

*いよふかたにちかたきふ風、押すま
いよふかたにちかたきふ風、押すま
いよふかたにちかたきふ風、押すま*

此唱哥ハ。徠存もまほられさりしあや。狂を
ほどこよれども。

○神紙

琉球事畧め云。慶長年中。奉朝の僧。彼國へ
ありて。其風土の事。紙記せし書を案する。此

玉れけり。先一男一女化生カセ。一男を二子リキ

工といひ。其女をアマニキエといふ。中良葉に。アミキエ
中山世鑑に。阿摩美

久なり。此況上お記せる岡岡の條と異同あり。
あり考やべし。是非ハ後人正すべし。此時其時小ありて。

波小漂ウラヤへ。夕シカといふ木の生し。出志を植く。山乃

神カミと。ニキエといふ草。成りて。アダンといふ木。成

杪キナと。玉の體と。遂に三子成生。一子ハ取々の

主の始なり。二子ハ祝イハヒ此始なり。三子ハ土民の始なり。

其國に火ふかりし。龍宮より求ねて。其玉成就。

人物を生して。守護の神あり。あれをキニマ

モンと稱す。中良葉に。キニマモンを諸書に。君真物と記せる。そなる。キニ
マ。モノの字訓をキニマ。モンとすむなり。イキシキニヒミイリイを

洲子後時ハ文相公達カト云々和創の創カリ
上リつるめく琉球ハ日本の古語ナリト云々

其袖小陰陽あり。

天よりりり紙。キライカナイノ。キンマモンといひ。海

より上るを。オホツカクヲクノ。キンマモンといふ。毎月毎に

出現して。託女トクメト云々。中良薬中良薬不不託女トクメハ巫女ウラハメのめく。祈々

の拜林イハヒハあり。中良薬中良薬不不拜林イハヒハいりあるを。法ハハがうを

体タのりり。其託女トクメハ二十二人を。皆王家ミヤノたり。王妃

も亦一人あり。國中の託女トクメハ其数を云々

其神カミト云々怒り時ハ國人腕折ウデヲハおとす是を

拜慰イハヒ心む。中良薬中良薬不不是日コノヒヲ神代カミヨの。其俗コトを。嶽タケ々浦々

の大石大樹オホイシオホキト云々。其俗コトを。嶽タケ々浦々

七年シチネンハ一回ヒトタビの荒神アラカミ十二年ニジュニネンの荒神アラカミありて。幸サイ玉タマ諸

嶋シマ一時イツジに出現イハレを。荒神アラカミの出現イハレを。キンテスリと

いふ。其の年トシ金糸カネイト糸イト。其年の八九月の間マヒり

アラリといふ。そのあつる。その山ヤマをアラリ嶽タケと

いふ。五色イロノあざやふして。種タネ々のタテ巖イハあり

く。之コノの嶽タケハ三ミなる。其大オホハ一山イツヤマをおほ

ひ盡ツクす。其十月イツトキにありて。神カミカカハハ出イり。

託女トクメ玉タマ。各オノオノ鼓ツヱら歌ウタうウひく。神カミ代ヨハハ王ミコ

宮ミヤの座イハを以モて。神カミ乃ナリ至イる所トコロと云々。兼カミ三十餘サウジウ

を立タり。其兼カミのオホなる。其コノ七八丈シチハチマタの輪ワ

十尋あり。小ありとの一丈むかり。又山外
 時ありと現る。其数多くあらう事あり
 又よくなきるあり。其面ハ明あむ。袖のきこ
 どの紙着る。其の衣裳はらまら度よく。或ハ
 綿繡のぬくあり。麻衣のぬし。二人のきこを
 従ふ。二脚五脚といふ其衣裳ハ日本の製はぬ
 ありて。小袖ハ袴なり。沐はうなるあり。又
 臺紙鞭打事あり。臺の啼交火のぬし。又ラ
 ウチキウといふ海神あり。其のきこ。其丈ハ
 一丈ばうりありて。陰囊こもよ大きき水も

正あり。又うりしもの由もなり。其國乃人の君真
 物とらう。是等の神は事なり。とらえ
 中良葉のふ。君真物のキニマモこの字削あり。よよ
 め。自ら先生いふを分けたりけし。程事の子細ハ
 うり。今ふおおのら矢社ハ有り。若益人ありて
 穿縫まら。にハ。毎才天の社ハ巫女あり。やれが。ヤ
 コミサとて。蛇を連と来ア人成集先。其蛇可又

其れを罷りしものに言付、いさふたがわど、いふを
盗人ともふものなりしと死せり。

○宗派

此國の俗、入唐より法成傳りて、成申りて、薩州
へ來りて法を學ぶ。衣ハ朱、笠を名と、袈裟
の外に一衣、袂を、其割背公の如し。断俗と名
づく。帽子ハ清人の笠帽の如し。纏を以て、
とたり。宗旨ハ臨濟宗と、真言のみたりと、
山傳信録に之をえたり。

○葬式

國中の民ハ皆火葬あり。官宦のものは有力の家
てハ先一人生葬あり。時を踰る昇出—火葬
ありともありともなし。又水葬ありて、腐肉を去り、
白骨紙甕に入石坎の中、小藏多と名。法事を
終る時、啓し、くそ紙視とたり。

○棺槨并墳墓

椀ハ圓く製を、其高ハ三尺ぐり。死者の膝蓋
を湯みそく洗ひ、足を屈せ、跣をかぶめ、棺
に納むるなり。墓ハ山小穴紙を穿ちて埋め、
墨み石を以て、貴家ハ石を立派に磨く。

石壇墓門いしだんぼかどを建つるも有とあり。

○書法

書法へ日本の大摺流おほさくしゅう玉置流たまざきりゅうをとちよに假名平假名なづな六國中むくにち此を錢せんおしなづと通用つうぎんを薩州さつしゅう藩中はんちゆうへ付来つきたりの書翰しよわんいづれも堅状かたじょう摺杖しりょう小く一筆いっぴつ管上くわんじやうり文衽ぶんせいを用もち由書しよらる付来つきたり了倚よりをた手に紙しを持もち懸腕けんわんありてさるり日本と同じ。

○耕作

田地へ九月十月の間に耕かし種時たねとき十月十一月の

以緑秧きよこ水みづを出だれば日ひ和やをえ合あせば田いはら移うつし極上う節せつ大雨おほい時とき不ふ行ゆりれ雷かみ多おほきし蚯うづ蚓つ鳴なる氣候きこうあらうも春はるのめし。まうり翌あつち年としよりり耕かす。夏五月なつご獲と收とむ。長次ながへまぐ子夏なつ麥むぎをあつけ。六月むつきよりり至いたり。大腿おほ志しをく修かり。海雨うみ横よこ飛とびし果くだ実み皆みなあらう。小よりり獲と納とれをあらうせがれば。風換かひ多し。からがあらう。小此こ國くに中ちゆう。秋あき耕かす。冬後ふゆ為なる春耘はるまき。夏なつ收とむ。六月むつき。九月くわがつ迄いたり。農業のうぎやう以も事こととせられる。農具のうぎハ。大抵たいてい日ひ本ほん製せい衣いを用ゆ。時に。鋤鎌こをらう。琉球りゅうきゅうをらう。修物しゆぶつハ。浸池しんちくくと用に。信じとうなり。高たか田たハ

琉球言
天水を港へ下田ハ以手地ホー泉成引く
トし漑ぐ入江小河をどいつれも箇入たる所
田地の用多ふなり 穀一と云

○貢物

琉球國王より

公へ

物件ハ

儀刀一腰

飾馬二疋

卓

大盒子

朱漆玉漆
沉香青貝

芭蕉布

大平布

幕

久米綿

泡盛酒

官香

龍涎香

壽帶香

大抵叶等の物たるより
湯とのい

琉球人一の

國王

白銀百枚

綿五百把

使者

白銀二百枚

時服十重

惣人数

白銀三百枚

右の通り紙下し賜りたるなり

○産物

物産ハ中山傳信録土産の部ふへいづれへ之に
りらせり 其條下に油樹なるもの有り 其葉橋
の如く 實もさす 橋の大ナ此如く 以て油す

控系。念ふ。可ら。ん。た。と。記。せ。り。此。池。燈。籠。は。な。
ら。い。蓄。蓄。小。お。と。と。づ。り。益。り。る。物。を。る。べ。し。

○琉球語

中山傳信錄に載るる紙の如く。昨日、信を
て。て。問。ふ。ふ。日。本。の。古。く。交。ひ。ま。す。り。故。こ。友
に。畧。き。ぬ。和。漢。三。才。圖。會。小。十。余。言。を。載。し。

- 日 ひ 月 つき 月 つき 月 つき 月 つき 月 つき
- 火 か 酒 さけ 男 おとこ 女 おんな 父 ちち 母 はは
- 兄 あにい 弟 あにい 刀 やいば 鈕 かぎ
- 神 かみ 水 みづ

中らあるに。中らり。以上の人のいづれも日本

語を用ひ。中らり。以下は。わくのぬれ方を紙
用りり。るる如くし。

○屏風 附 伊呂波

此國はとく月より屏風の四枚おたより。上り
文行忠信。春夏秋冬。なまの四字紙大字は
一字宛書。その下は。上の大字をなまの
り。待紙。二より。に。ち。と。な。ん。附。く。つ。ふ。い。ろ
け。假。名。入。上。り。も。り。つ。ふ。ぬ。く。玉。中。の。を。機。通
用。り。る。事。為。朝。の。子。舜。天。王。の。時。り。と。し
し。り。と。り。ふ。け。ぬ。人。漢。文。を。讀。み。る。日。本。乃

めく。初志をわどとともとる。此二條。上よ云
る。一。つうねるよ紀を。

○讀谷山王子の和歌

林子平が三國通覽圖說中の琉球島統了。
明和元年來聘せし。續谷山王子朝桓が。

日者のめく 祿せし和哥を侍史よりとて。ワラま

七首紙載せり。予が父國創法眼。時和の

しめ。竹公主の御前に依りし時。續谷山

王子が。手づり書と。笑後おやもく。なまら

道行ありの和歌十四首を。御前より依りし

女房より。字をせてたぬりし紙。こころかく終

着せられし。今いむが。しき紀念とせりぬ。

原書のまゝ紙たなよに。と。字取。摩の玉

人の。我國此風に。かくしてなまら。しき

とめをの。

杖桑の。大村公海代か。しき。あはら

た。武翁の國。おを

ひきり。ふ。紀後の玉。松浦といふ。あはら

と。九月十三夜の月紙。え。あはら。の

も。あはら。しき。あはら。

讀谷山王子朝桓

秋毎に足し紙をよそ加々のをまつしこころの月影

追風をよそふのふに十餘日影をよそえ

ゆきしあはれ

追風や風の影をまつほつぬきぬの影つら

酒麩の浦より敷盛の塚をよそえ

江戸の浦よそは深くむれ流しつるありぬよぬき風

唐ふきの草

浦風も枝をよそふ所けぬき枝よ葉の影つら

三郎のふに

おれは海をよそ月をよそえよのふによそえ

後山

くろなき時代の後のむねをよそえよの影つら

田子の海をよそふのふに

ねりもよそ田子浦をよそえよの影つら

不二

人よそいふ影つらよの影つらよの影つら

よお月影つらよの影つらよの影つら

の月影つら

旅しつらよの影つらよの影つらよの影つら

友枝といふ所にて書きたりし所

友の月と云ふ所の書くは月と云ふ所を記す所を記す所

松尾山

名種や記をすそくをぬ松尾山と記す所の書くは

海軍の里

少所を記す所の書くは海軍の里

記の紙

記の紙は記す所の書くは記す所の書くは

去方一匹

油の書くは記す所の書くは記す所の書くは

附録 二條

○鎮西八郎の事

此書とて不副劄の功を修めたり去やごとく

君より琉球國の臣紫金大吏蔡温が撰りし所

の中山世譜を併傳せし所ありぬ舜天王の

父の事。此書のもじりも引取ぬ傳信録

あり舜天王日本人皇後裔。大里按司朝公男

子也。とあり。新公は朝公より上りたり。これ

ども此文もよきと為新公に記す所を後なり



ふりふ似たり。中山世譜云。南宋乾道元年己酉。鎮西為朝公。隨流至國。生一子而返。其子名尊敦。後為浦添按司。中畧國人推戴尊敦為君。是舜天王也。又云。舜天王。姓源。号尊敦。父鎮西八郎為朝公。母大里按司妹。云々。此文めて。舜天王の父ハおおたるるるり。のりふと。

○琉球人の書翰

此の紙はしるも。琉球の王子より。後列乃。家長へ往來の書二通紙得たり。福瑞と云ふ。紙ありんも。お意ふられぬ。お書の手紙模写。

あてて好事の士に看に呈上。上包ハ西の内乃。ぬれ紙あり。封一状ハ唐紙を奉書。うけお。切らぬ。義村王子の古中に白麻二十帖とあり。後おとて。お名とる。紙の名をり。義村王子。大宜見王子とも。當年京都へ来。聘せり。宜野湾王子の兄弟たり。書翰の宛名ハ。何れあれハ。開し。手跡あり。日本風。お疑。草も。やと。う。う。人あり。く。し。あ。も。り。く。ぬ。く。け。あ。し。く。ハ。大。務。流。と。う。に。お。に。お。り。と。う。ん。

一昔昔從遠道來
昔昔昔昔昔昔昔

出物此心常
出物此心常出物此心常

願出此心常
願出此心常願出此心常

空意此心常
空意此心常空意此心常

一昔昔昔昔昔
一昔昔昔昔昔一昔昔昔昔

六昔昔

大德元年

夏月十日

新祝
无



李善

崇

移之去去也時也者物極則反也
忘好之使無破私存不私而後取
入之善後好也

法札之海見公亦全

比書也勅此至好也

新身逐逐何能下

神胎心好必成後

法祀香中集宗是

玄洞廟子一第發真

光之氣又之氣

魂

茂村亭

寛政

二年



琉球

紀

跋

今歳寛政二年秋冬琉球國王より慶賀乃
 使臣 東に都に來り聘すこと聞て四方諸
 君子 余は居舖に顧をたまひ中山傳信録
 琉球車略三國通覽ふと此書と贖ふふ毎
 此等此書乃外に琉球國名時實を
 考蒙の耳ふも入易かむむやうに記する書乃
 あらまほふと宣ふより利みたる足の逸く
 萬象亭みいつて先生は請ふ先生亮爾と

跋

夫々笑て曰吾子、以奉あつむ事とらじしめ
 推知して萬國新語の遺稿より琉球の部と
 抄出し一編の小冊とす、これを取出して
 授け給ひぬ、余手此書足の踏とまらざる願也
 梓亦鏤る世にむかやうに希は書能爲に
 都下忠紙あつむの貴かり、おと紙實了
 先生著述此書、余家の揺錢樹とす

寛政二年九月 書林 申椒堂主人誌



木村寫中良先生著述書目

琉球談

既刻 全一冊

朝鮮談

近刻 全二冊

萬國新話

初編五冊出来

紅毛智恵心洋

全二冊

此書ハ琉球の閑談、茶、始く日か、往來の
 由來、彼玉代々の傳記、年中行つ、官職乃
 以才、人物、衣冠、宮室、番賤、草木、鳥獸等の語
 代わ、琉球狂言、小奇の文句、彼國の言語
 小の、悉く載て漏らさるる。

此書を琉球談の如く、朝鮮國乃事實
 を記し、朝鮮文字、茶に言語等々、
 悉く載り。

萬國世界の内乃、あ、奇談、
 次編三部、人、追て刻ん、
 歐羅巴之部 亞弗利加之部
 亞墨利加之部
 紅毛めて、製他、漱器の、先生の、
 を以て、日か、製他、
 形式、減、古今の、

文化三丙年
 恩謝正使トシテ
 讀谷山王子
 十月十三日着
 同 廿三日登
 城 廿七日
 御暇
 同三十日上
 御宮津礼
 十二月



西洋奇譚

近刻 全五冊

先づ行れたる紅毛輕語の後篇にして
初編にりぬる事を記し彼邦を
用ひ武具馬具の図式を附録す

萬象雜組

同上 全十冊

天文地理をとりて万国の内ふあら
あはるゝ實を載ふか存乃故事
古云にありまを部をわらゝ見
安く記す

日本地名便覽

既刻 両面摺

都城陣營神社仏閣新古の名所等
其地の名物等部以合テ見安く記す
連奇俳諧の序を遊談の久懐す
とべき書也

農工力くらゐ

近刻 全五冊

紅毛の工支代以て製し越柱越重
水車風車木匠具泥匠具以て日
斗みり斗福とて新車榴石磨等
の図式をり

東都書肆

日本橋北室町二丁目

須原屋市兵衛梓

Handwritten notes and stamps on the left page, including a vertical character '万' and various illegible marks.



